
2003年 ACTMANG ミャンマー報告

期間 2003 年 11 月 29 日 ~ 12 月 11 日

場所 ミャンマー エーヤーワディー川 河口流域
ピンダイエ森林区・マイマラ自然保護区
オッポクインチャン村周辺地域

内容 マングローブ植林
自然保護の考え方
行動概要
マングローブ材の利用
イラワジデルタの農村基礎調査
イラワジデルタ地域の教育事情
ミャンマーレポート
農家調査
マングローブの花とコウモリ
現地スタッフの横顔 など

発行 ACTMANG (マングローブ植林行動計画)

〒 164-0012 中野区本町 3-29-15-1104

はじめに

これは、2003 年度、ACTMNG の第 2 回目調査のメンバーの報告書である。公式な報告書は別に作成されるので、これはかなり私的な報告書である。

日程、場所などは表紙に書いたとおりである。日本からのメンバーは下記の 6 人とヤンゴンの FREDA から 2 名、現地のスタッフである。

●日本からのメンバー

向後 元彦	ACTMNG の代表
柳田 耕一	日本環境財団・地球緑化の会・(株)ティエラコム
三輪 主彦	みわ塾・地平線会議
中山嘉太郎	薬剤師・ランナー・植村直己賞受賞
筧 美知子	東京農業大学・探検部
山上 庄子	東京農業大学・学生

●日程

11/29	成田 / 関空 ~ バンコック ~ ヤンゴン
11/30	ヤンゴン ~ ボガレー (森林局 レストハウス)
12/01	ボガレー ~ オップクインチャン (FREDA レストハウス)
12/02	植林地 調査
12/03	植林地 残存率調査
12/04	アシェイピア村 調査
12/05	タマインパレ村 マングローブ調査・学校訪問、マラソン
12/06	オップクインチャン村 調査
12/07	マイマラ島お寺訪問、ピョンムエ島マングローブ調査
12/08	ワニ園見学、午後ボガレーへ
12/09	ボガレー ~ ヤンゴン
12/10	ヤンゴン FREDA 訪問 夕刻ヤンゴン ~ バンコック
12/11	バンコック ~ 成田 / 関空

●FREDA

FREDA(Forest Resource Enviroment Development & Conservation Association)
288/290 Shwedagon Pagoda Road, Yngon Township
E-mail : FREDA@mptmail.net.mm

●表記について

地名、人名の表記は統一するのが望ましいが、今回は各自が現地の方の言葉をどのように聞いたかを重視した。そのためあえて統一しないままにした。

正式の報告書は統一表記にするが、このレポートは表記が入り乱れていることをご了承ください。

マングローブ林が危ない

1990年8月2日 『朝日新聞』の記事から
(ミャンマー、イラワジデルタのマングローブ植林の発端
について述べている記事です。)

向後元彦 東京農業大学客員研究員

1940年、東京都生まれ。東京農業大学
農芸化学科卒。「砂漠に緑を」代表。78年か
らアジア・太平洋諸国へのマングローブ植
林助言などに従事。87年、ロレックス賞受
賞。著書に「緑の冒険」(岩波新書)など。

マングローブは熱帯、亜熱帯の海岸や川沿いの汽水域(海と川の水が混じり合うところ)に分布する湿地林。その存在は薪炭林や用材の供給源としてだけでなく、沿岸の浸食防止、防波・防潮による農地の保護、さらに海の生態系との密接な関係から、漁業資源の涵養(かんよう)という重要な役割をもになっている。いま熱帯住民の「生活と生産の基盤」というべきそのマングローブ林が、乱伐や開発などによって各地から姿を消している。その結果、貧しい「南」の人びと――90ヶ国以上、全途上国数の70%にあたる――は一層苦しい生活を強いられることになった。ひとつの事例として今年5月～6月に訪れたミャンマーの「マングローブ林危機」について報告する。

ミャンマーの首都ヤンゴン 炭材不足、深刻に

ミャンマーに行ったのはUNDP(国連開発計画)からの依頼だった。首都ヤンゴン(ラングーン)の300万市民の竈(かまど)から火が消えかかっているというのだ。炊事に使う炭を供給するマングローブ林が危機的状態にあり、その再生への対策がぼくに与えられた課題だった。ヤンゴン市の炊事用燃料消費は年間100万容量トン、そのうち40%が薪、60%がマングローブの炭である。ヤンゴン市の台所はマングローブ林に依存していると言っても過言ではない。月収は中流家庭で1500チャットぐらい(公定では1チャットが25円。だが実勢では6円ほどだから約9000円)。炭代はその6%を占めている。東京のわが家の燃料費(ガス代)は家計の1.5%ほどだから、驚くべき高い負担率といえる。昨年森林局がマングローブ林の保全の必要性を公表しただけで炭の価格が倍になり、そのため保全計画は実行されなかったという。ミャンマーでなぜマングローブ林問題が政治的優先課題になっているのか、そうした背景を知ってはじめて理解できた。

高木なくまるで藪

ヤンゴン市で消費される炭はすべてイラワジ・デルタから供給されている。そのマングローブ面積は東京都の60%ほどにあたる18万ヘクタール(1983年)。それだけの規模であ

れば炭材不足はありえない。だが、実際現地を訪れて疑問はとけた。たしかに面積は広いが、すっかり荒れている。高木はほとんどみられず、森林というより藪(やぶ)にちかい状態だった。それだけではない。良質の炭となり用材としても利用度が高いフタゴヒルギ、オオバヒルギ、オヒルギ、そしてサキシマスオウノキといった樹種がまったくみられないのだ。

乱伐の背景に植民地支配も

その荒廃をみちびいたのはヤンゴン市の人口増加に伴う炭需要の増大であった。そのことは疑問の余地はないが、実は、そうした状態にいたったのには、さらに時代をさかのぼった因果関係を知る必要があった。1000年以上も昔のこと。1869年にスエズ運河がひらかれ、ミャンマー(当時は英国領ビルマ)はアジア最大のコメ輸出国になる。その時代にすでに現面積の数倍のマングローブ林が破壊され、水田に転換されていたのだ。1948年、ビルマは英国から独立する。だがそれから28年すぎた1976年までマングローブ林は管理されなかった。その時代の乱伐も植民地支配の後遺症といえるだろう。今日のマングローブ林問題の背景には、英国時代の爪痕(つめあと)が深く残されていたのである。いまでは質が悪いシマシラキという樹種が炭材として使われている。だが、それですら数はきわめてすくなかった。800あった炭焼き窯は、炭材不足から一部は閉じられはじめたという。シマシラキが消滅するのも時間の問題だ。一刻もはやく大規模植林がされねばならない。

少ない植林の適地

ところが、植林できる適地がないのだ。樹冠の影でまもられていた土壌は、乱伐によって乾燥化し、多くの「マングローブ湿地」はマングローブが育たない土地に変わっていた。デルタ地域の大半を占める水田なら植林は可能だが、農民の同意が得られない。植林とコメの生産では収入の差がありすぎるからだ。

もしマレット・イン(ビルマ語で「ワニと女神の漁場」)という大湿地の植林が提案できなかったら、ぼくは失意のもとに帰国することになっただろう。幸運の女神、いやワニの女神が味方してくれた。ヤンゴン市の西50キロに位置する大湿地帯を船で訪ねた。見渡すかぎり人の背をこえるアシの原。マングローブが一本もみられない「内陸」の湿地。そこに植林ができると誰も考えなかったのは当然である。だが、かつてはそこもマングローブで覆われていたことが、古い地図で証明された。その再生は不可能ではない。ヤンゴン市の炭需要をまかない、恒久的に利用するには24000ヘクタール、つまりマレット・インの半分の面積に植林されればよいとの計算がされた。概算で1000万ドル(約15億円)の予算、10年計画のプロジェクトとなるだろう。ヤンゴン市の「燃料危機」はまじかにせまっている。時間の猶予はない。UNDPに提出する分厚い「マングローブ植林予備調査計画書」が、わずか1週間で完成できたのは、二人の森林局顧問をはじめとする森林局のスタッフの力量によるものだった。一ヶ月間の滞在をとおして、ぼくは彼らの知識の深さと実行力にいつも感心させられた。そして、多くの日本人の例に漏れず、ビルマの人の優しさにふれ、この国の人たちのために何かをしたいという気持ちにとらわれていた。予定では、今年の10月から植林のための予備調査がはじまる。日本はこの国の「マングローブ危機」解決に対してどんな貢献ができるのだろうか。

仏教における自然保護の教え

これはオーンさんの書いた最新のエッセイです。ここでは、ビルマ人の自然保護に関する考えだけではなく、私たちのプロジェクトの進め方にたいする明確な指針をもしめしてくれました。共有すべき思想として、その翻訳をここに掲載しておきます。

向後元彦

仏教における自然保護の教え

わたしが子どもだったころ、曾祖母は、仏様へのお祈りのおわりに、いつも こう唱えていた。「わたしの善行の功德が、地球上の生きとし生けるものにあまねく与えられ、健康で幸せな暮らしがおくれますように」。そして、つづけてこゝも唱える。「地上の9千万の生き物、水の中で生きる1億の生き物に、等しく、わたしの善行の報いがいきわたりますように」。幼いわたしは尋ねた。「どうして水の中には地上よりも多くの生き物がいるの？なぜ、そんなにたくさんの生き物がこの地球にいるの？」。曾祖母は答えた。「正確な数はわからないけれど、わたしはそう信じているの」。彼女の信じるこゝろによれば、この地球には、1億9千万種の生物種がいることになる。わたしは、そのあまりの多さが納得できなかった。しかし、最近になって読んだ『ナショナル・ジオグラフィック』によって、曾祖母のことばの正しさを知ったのだ。バージニア・モレルの推定によれば、現存の生物種は10億をかぞえるという。これは曾祖母の信じていた数値にちかい。だが、現在、地球上の種の多様性は崩れかけようとしている。

テネシー大学の研究グループによれば、今後100年以内に、地球上の動植物種の約50%が絶滅する恐れがある、という。魚、鳥、昆虫、哺乳類、植物などすべての生き物が脅威にさらされているのだ。植物学者は、8種の植物のうちの1種の割合で絶滅の危機に瀕していると推定する。危機的状況にあるのは、

孤立した島や熱帯雨林の鳥類、とくにめだつ大型哺乳類ばかりではない。地球の歴史において、過去5回の急速にすすんだ絶滅があった。いずれも壊滅的な天災に起因するものである。たとえば6500万年まえの恐竜の絶滅は、巨大隕石が地球に衝突したことで引き起こされた。だが、今日みられる絶滅の危機は、過去の場合とまったく異なる。この6度目の「絶滅期」は、天災ではなく、われわれ自身がおこしたものだ。ホモ・サピエンスと称する人類が「根絶者」の役割を演じている。

人間は、土地を開発し、あらゆるところに住みつき、あちこちをコンクリートで固め、森を皆伐して焼き尽くし、漢方薬をとるために野生動物を密猟して違法に取り引きをし、河川を汚染し、オゾン層を破壊してきた。そうした行為が地球全体にあふれ、生き物の生命を奪いつづけている。生物種はいったん絶滅すれば、けっして蘇ることはない。奪われた命を復元させることができない。8亜種がいたトラのうち、カスピアン、バリ、ジャワの3亜種は、ここ50年のうちに絶滅してしまった。中国南部にいた亜種のひとは、いまや野生でみることができない。残りの4亜種も絶滅危惧種のリストに挙げられている。トラは生態系の頂点にいる生物種である。それが絶滅したあとの生態系への影響は計りしない。王立キュー植物園の園長ギレイン・プランス卿はいう。「われわれが地球上の植物すべてを調べ、分類できずにいるうちに、その一部がすでに失われている。絶滅の速さ

は、種のリストをつくるスピードよりも速いのではないか。 私たちにとって欠かせない医薬品 - - たとえばアスピリンからモルヒネまで - - は、すべて植物を原料としている。だから、植物相（フローラ）の一部を失うことは、有効な医薬品や化学物質を発見する機会を少なくすることを意味する。植物の1種が消えるごとに、未来の可能性がひとつずつ失われていく。絶滅した植物種のなかには、エイズの特効薬があるかも知れないし、ウィルスに耐性がある成分がふくまれているかも知れない。だから、「地球のため」というよりも「私たち人類のため」という、いささか利己的な理由で植物種の絶滅を阻止しなければならないのだ。しかし、どうやって絶滅を未然に防ぐことができるのか。絶滅の原因が人間にあるならば、その解決策もまた人間の側にあるはずだ。だが、解決には、永い歳月がかかる。教育が大切だ。生命をどう考えるか、保全とはなにか。そして、さらには実践の段階がある。「いうが易し、おこなうは難し」といわねばならない。

ここで、基本的な資源である「水」について考えてみたい。世界人口は2050年までに90億に達すると推定される。水の供給が間に合わない。ダム、灌漑、井戸でえられる水は絶対的限界にちかいのだ。サンドラ・ポステルは『地球の水 危機』でこう述べている。「歴史が教えるところによれば、灌漑に依存して発達した文明の多くは、その後、滅びる運命にあった」。いま、世界の農業生産量の2/3が灌漑で賄われている。世界の食糧は、農業、畜産、漁業に依存する。だが、そのどれもに問題がある。漁業は乱獲によって、世界のほとんどの海域でゆきづまっている。牧畜に利用される草地の20%は、過剰放牧によって生産力の低下をまねいている。また、農地面積も今後めだった増加が見込めない。たとえば新たな農地が拓かれても、その面積は、侵

食、塩害、宅地化によって失われる面積をうわまることはない。開拓の余地をのこすのは湿地と森林だが、途上国では、農業と林業と漁業それぞれの間で、土地利用にかんする対立がおおきな問題になっている。また、森林面積はさまざまな要因によっていちじるしく変化する。地球規模の気候変動、土壌の劣化、水資源の変化、農業システムの発達、生物多様性や文化自然遺産にたいする保護の推進、都市化、雇用とレクリエーションの創出といった諸要因である。これから世界人口は増えつづけ、資源は減少しつづけ、環境は悪化しつづけるに違いない。そんな時代にあって、私たちはどう認識しているのか。幸福は、己の快樂と物質的な保有欲を満足させることにはかならず、自由は、外部の圧力を制御する便法であり、自分以外の人間は、競争相手もしくは無関係とみなしている。いま、人間は、地球上の資源をわがものにするために争い、その傾向は日増しに高まっている。我欲と反感にもとづく誤った人生観によって、麻薬、暴力、ストレス、精神障害、テロ、自殺、エイズといった社会的病巣が蔓延し、科学、技術、情報・通信手段の発達は、個人の啓蒙や生活の質をたかめる方向にはむかわず、浪費、怠惰、陶醉を助長させる結果をもたらしした。欲望を満足させる過程で競争は不可避であり、それが、互いの敵愾心をあおってきた。異なった民族間、宗教間の対立と憎悪はもともとなかったとはいえないが、それが、限られた資源をめぐる争いで拍車がかけられる。インドの偉大な指導者マハトマ・ガンジーは言った。「すべてのひとの必要とするものはある。しかし、すべてのひとの欲望をみたすものは決して存在しない」。

現在、私たちは、法律や取り決めをもって、森林、野生生物、生物多様性の保護や、砂漠化、地球温暖化、気候変動の緩和といった問題にとりくんでいる。保護区 - - 住民参加と

非参加のケースがあるが - - を設ける試みも、多くの先進国 と途上国でされていはいはいる。だが、それらは、わずかに成功例をみるにすぎない。中国などの東洋文化圏には「衣食足りて礼節を知る」という諺がある。しかし、富める者と貧しい者の差は日に日に広がるばかりだ。世界人口の20%にあたる11億人が1日1ドル以下の極貧生活、36%にあたる20億人が1日2ドル前後の生活をおくっている。途上国の辺境地域では、栄養失調状態の5億人と、貧困にあえぐ8億人もの人びとが暮らしているのだ。「アジェンダ21」のアクションプランの起案者たちは、途上国における飢餓救済に6千万ドルの予算を見積もったが、それに応じた先進国はすくない。スカンジナビアの少数の国が、リオの地球サミットの誓約にしたがってGDPの0.7%を供出だけである。こうした状況を知るにつけ、自然保護、つまり自然と人間の関係を明確にしめした概念が必要なことを痛切に実感する。人と人との関係を一歩すすめて考えることも、より積極的なスタンスをもつ意味で重要になる。いかなる人間も、よき隣人としてみなさねばならない。自然界の法則のもとでは、すべての人間が平等だからである。しかし、それだけでは十分とはいえない。

最近、平等についての多くの論説をみる。だが、それらの多くは、部分的平等であったり、言葉のうえだけの平等であったりする。片寄った平等の理解は、いきおい、ただ権利を主張する競争的な姿勢にむすびつく。欲望、疑惑、恐れといった感情に根ざす平等になりがちだ。協調は、共に生きるという要求であり、志向である。それは、競争における妥協にとどまらず、互いのむすびつきと依存性を深めてくれる。競争は、協調によってバランスを保たねばならない。そのとき、仏教という「メタ」の概念 - - 無限の愛、条件に左右されず、あまねく与えられる愛 - - の助け

を借りることになるだろう。だが、多くのひとは、善意や愛がなにかを理解していないのではないだろうか。彼らの「愛」は、限定的、条件つき、排他的、差別的だったりする。仲間うちでは「愛」をしめしても、それ以外のものには愛をむけようとない。善意や愛の本質は、どこにおいても境界がなく、わたしの曾祖母がそうであったように、自然界のすべてにむけられるものなのだ。自らの功德が、あらゆる命に等しく与えられることを願い、実践することが愛である。私たちと共に生きる億兆の生命は、そこに存在し、自らの命をまっとうするまで生きる権利があたえられる。それが仏教の教えであり、著名なイタリアのサッカー選手バジジョが仏教徒になった由縁でもあった。互いの意志の疎通、互いの依存度をふかめるために科学技術の発達があった。ところが、それが歪められ、現代人の多くは、より攻撃的な競争心をもつようになり、自己の財産を他人の出費で守らせるといった考え方に染まってしまった。人権は私有財産の保全手段になりさがった。

タイ国の僧侶ブラユー・パウトー師は自著『仏教は21世紀を救う』のなかで、まずいったのは、現代人の行為に影響をあたえた2つの姿勢 - - 人生は人間同士の競争を生き抜き、その一方で自然界と戦うこと - - の誤り、そして、その意識の根底にある征服欲の愚かさ、である。師はつづけて、「もはやそうした意識ではやってはいけない。私たちは、人間同士の協調と、自然環境との共生ができる方法を学ばなければならない。人間同士が友であるように、自然環境もまた友であり、征服すべき敵ではなく、ともに学ぶ仲間なのだ」と説き、さらに「現代人の欲望がいかに歪んでいるかを明らかにするために、私たちは、ものの考え方、人生の意味、生きる目的に影響をあたえてきた第3の姿勢について考究しなければならない」と問題提起をおこなっ

た。人類は永いこと自由をもとめてきたが、その自由の定義は曖昧で、首尾一貫したものではなかった。現代の主流となっている自由の概念は、外部から制約されず他人や自然を制御する気ままさ、といったもの。だから、より多くの物を所有することで幸福感がえられる、といった誤った考えがはびこることになってしまったのだ。しかし、自然環境の悪化にともない、こうした「自由」がゆるさなくなってきた。人類の存続をゆるしてもらうためには、私たち自身の快楽を犠牲にしなければならない状況が生じてきたのである。パトニー師によれば、人類が幸福に生きてゆくには3つの段階の自由が必要だという。第1は、自然とともに生きる自由、物質的自由である。これは、生きていくうえで不可欠な4つのもの - 食物、衣服、住居、医薬 - が十分に与えられ、欠乏するおそれがない状態をいう。自然災害からの解放も含まれよう。第2は、人間社会における自由。他者から搾取されることなく、安全に生きられる自由である。だが、この2つの自由は、つぎに述べる第3の自由と結びつかねば意味をもたない。それは内なる自由、個の解脱である。この境地に達するための自己開発こそが、今日、もっとも重要なことである。物質的、社会的自由を手にいれると同時に、私たちは、どのようにして自立し、満ち足りた内面をもちえるかを修得しなければならない。内なる自由は、自らの知恵によって開発された己れの心に、より大きな満足を見いだす能力をそなえたものなのだ。その能力をつけることこそ、自然や他者を搾取せずに、物質的、社会的自由から切り離された心の自由をもつ条件となる。内なる自由は、物質的、社会的自由が拠って立つことができる基盤を保証する。もし、内なる自由がなければ、「幸福」をえるために、いっまでも搾取がつづく。そして、搾取があるかぎり、物質的、社会的自由

が達成される実感をもつことはできないのだ。

私たちの自然界とのつき合いは極端を避け、調和がとれたものであらねばならない。極端の一方の極には天然資源の搾取があり、もう一方には、自然界を軽視し注意を払わないという姿勢がある。自然界と正しくつき合うには、まず、私たちがおかれた状況をもっと深く知る必要があるだろう。私たち自身が自然界の一部である、という認識がもとめられる。人間は自然界と無関係ではありえないし、まして自然界の支配者でもありえない。人間は自然の一部であり、自然が人間に影響をあたえている、という認識さえもてれば、私たちの野放図な行為は終止符をうち、調和のとれた方向にむかっていく。人間の行為が、人間と自然双方にとって有益になるように、その相互関係に気をくばることになるはずだ。

昨今、持続的発展とか、生態系に適応した経済といった議論がふえてきた。経済が健全であるには、自然もまた健全であらねばならない。すでに述べたように、自然との調和を計るには、こうした認識が基礎となる。真の成功を手にするには、生命あるものをどう観るかという自然観と、既存の幸福と自由の概念をどう変えるか、にかかっている。いまこの社会で信じられている道徳や倫理は、ただたんに世界の現状維持のために役だっているにすぎない。そうした世界にあって、仏教の教えは、より能動的な倫理規範と新たな思想を生みだしてくれるだろう。その教えをまとめると、つぎのようになる。

- 1．自然体系のなかにあつて、人間はたんなる構成要素のひとつにすぎない。だからこそ、人間の行為は、自然体系全体の調和と利益を計るべく心がけられねばならないのだ。
- 2．人間をふくむあらゆる生き物は、ともに

自然界の法則にしたがって生きる 仲間であり、いかなる生き物も幸福を望み、苦しみを避けたいと願っている。この点においては、人間も人間以外の生き物も変わることはなく、自然界の法則のもとで、区別もされず、特別視もされていない。環境を破壊し生き物の殺す行為は、いかなる状況においても許されず、いかなる人間の行為も、普遍の愛、調和と互惠、自然との一体化をめざすことが求められる。3.理想の生き方は自由が伴ったもので、それこそが真の幸福への道といえるだろう。自由には、自然環境と衣食住医、社会との関係において不安がない、という外面的な自由と、さらにそれを越えた高レベルの「内なる自由」がある。内なる自由は、人間の内面の開発によって実現される精神的、知的成熟の境地であり、その獲得によって個人の幸福、さらに環境と人間社会の関係をより建設的なあり方に変えていく作用をもたらす。

自己の内面の開発によって「内なる自由」が獲得されたならば、人間は、もはや外部との関わりにおける自由を必要としなくなる。かわって、能動的な倫理観が構築されることになり、妥協なき調和の境地に到達する。そして、経済成長は人間の内面の開発と歩調をあわせることになるだろう。これこそ持続的発展の道ではないか。精神の発展が最高段階に達したとき、人間は、欲望、妄想、憎しみから抜け出すことができる。世俗的な生き方における誤った見方も是正される。それは、自然科学と社会科学の健全な発展の礎にもなるにちがいない。真の自由と幸福を知ることによって、生物の絶滅にも歯止めがかかるはずだ。生きとし生けるものがあまねく普遍的な愛と平和、幸福を自らのものとし、この地球を生きつづけるに足る場としてなっていくことを、わたしは願って止まない。

ミャンマー 報告 行動の記録

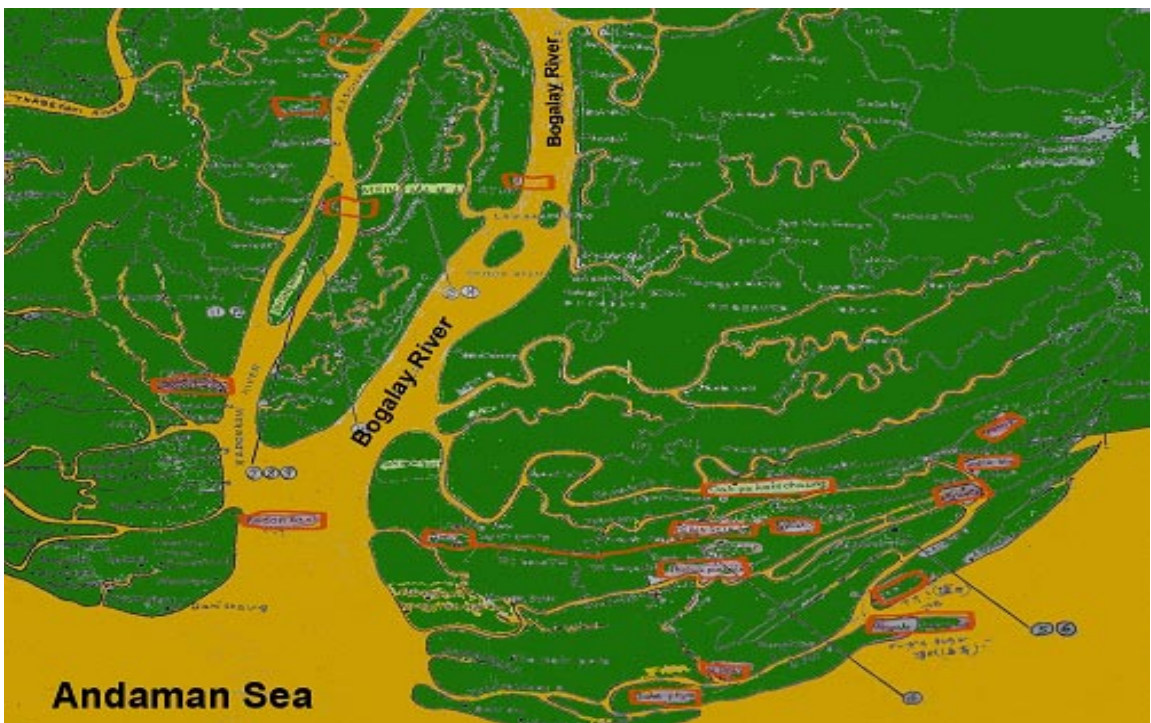
三輪 主彦

11月29日(土)

- 成田発(TG641): 三輪、中山、筧、山上、関空発(TG305): 柳田
バンコック乗り換え→ヤンゴン(TG305)午後6時45分到着。先発していた向後さんの出迎えを受ける。シュエダゴンパゴダの夜景を見学。尖塔部分にある巨大なダイヤモンドが輝く場所をみつけた。外国人5USドル。セントラルホテルで遅い夕食をとって就寝。

11月30日(日)

- 8時の船でボガレーへ向かう。港へはFREDAの車。日本からの6人に加え、FREDA事務局長のオンさんと、ティンウィンさんが同行してくれる。オンさんは元森林局のエライ人で、英国に留学し首席で大学を卒業したひとだ。75歳の年を感じさせない精力的、哲学的なひとだ。ティンウィンさんは40代後半。元森林局勤務の人で、今回のマネージメントをしてくれる。
- 汽船は前回と同じ3階建ての古い船である。船室はあまり清潔とは言えないが、船の旅は悠々としている。ヤンゴンをでて21マイルは運河。両側には水田が広がり、この国の穀倉地帯であることがわかる。川の水は土色の重たそう。この水が肥沃な大地を作る。船の時は13km。
- 午後3時 この地域の中心都市ボガレーの町(人口3万人?)に着く。FREDAのレストハウスに宿泊。雨季の前回と違って、乾季の現在は日差しは強いが涼しい。前回よ



りバイクが増えた感じだ。しかし公共交通はサイカのみ。

- 夜は近所のピアホールへ行く。マンマービールがなかなかうまい。

12月1日(月)

- ほぼ9時に ボガレー から オッポクインチャンのFREDAの現地レストハウスまで、専用ボート(ほぼ10人乗り)で移動。ボートの時速は20km。大船よりも速い。エンジン音がうるさい。
- 昼頃 オッポクインチャンのレストハウスに到着。小さな村のはずれ。目の前は本流と支流をつなぐ水路。船の行き交いは多い。ハウスの裏手には広い苗床があり、ソネラチアとアビセニアの苗が育てられている。
- 前回水浸しだった村は、乾いており、生活するには快適である。
- オッポクインチャンとテビンゼイの間にある 聖なる木(ソネラチア・アペタラの巨木)にお参り。仏教の国だが、木に神が宿るという精霊信仰と共存している。このあたりは日本の仏教と似ている感じがする。近くの植林地に行く。3年目のソネラチア・アペタラがある。三輪は木により掛かって写真撮影をしたら、背中からアリが入り込み、絶叫する。アリにかまれるとそれはそれは痛い。



12月2日(火)

- 2000年の植林地へ。ここはテビンゼイ村のヌーヌスエのお父さんの植林地である。同じアビセニアでもマリーナは成長が悪い。オフィスナリスは成長がいい。
- この地は水田だったが、塩害で放棄され今はマングローブを再び植えている。昼の気温は33 非常に暑い。
- 第2地点。3種類のマングローブが植林されている。 リゾフォーラ・アピキュラター→あまり育ちが良くない。 アビセニア・マリーナ→良く育つ。 ソネラチア・アペタラ→大丈夫 土壌のPHは5.0 川水は 5.5
- ワコンの学校訪問。この村は全員がマングローブの植林グループに入っている。我々とは最も関係が深い村だ。学校は臨時休校。村長さんとも親しくなった。
- ワコン学校は村人が作った。600,000チャットかかった。詳しくは柳田レポート。27.7。風があると涼しい。
- 学校の裏手に水瓶がたくさんある。乾季の間、生徒の飲み水だ。水がしみ出して減ってしまうので、困るのだそうだ。半年間も腐らないものなのか？
- 昼食をごちそうになる。ガヒ 魚醤(ミソに似ている) トウガンの天ぷら おこわ
- 椰子の木登りを見る。ブルギエラ・セキサンギユラ(六角ヒルギ)が良く育っている。RIF自然再生促進(下刈りをする)によってきれいな森の再生ができる。モリンダの実もある。
- ワコンから徒歩でテビンゼイへ戻る。テビンゼイ村で良く育った学校林を見る。
- 夜、今にも咲きそうなソネラチアの観察。花が開く瞬間を写真にとる。その前後にコ

ウモリが飛び交う。同じコウモリかどうか不明。

12月3日(水)

- 2003年の マングローブ植林地へ サバイバル調査(マングローブを植林後1年でどのくらい残っているかを調べる。)
- この地は現在乾燥しているが、雨季にはかなりグチャグチャになる。フェニックスパルドーサというマングローブの一種が入り込んできたら、その地は荒れ地になる。ここには鋭いトゲトゲのあるフェニックスパルドーサの残骸が残っている。ユーザーグループの人たちが人力で掘り返して、植林地にしたものだ。
- トゲは10cmぐらいある。ゴムの長靴だと突き刺さる。森林官の人たちはジャングルブーツという底の厚い靴を履いている。我々は長靴で、慎重に歩く。中学生たちはサンダルで平気で歩く。引率の先生は水を配っている。
- 調査は中学生たちに助けてもらって、人海戦術でやる。中学生は近くのニボアテ村から舟でやってくる。10乗りの舟に20人は乗っている。
- ここではザイロカパス・モルセンシス(ミャンマー名ピンレオン・日本名ハウガンヒルギ)とアビセニア・オフィシナリス(ミャンマー名ターメ・日本名マルバヒルギダマシ)の植林。かなり葉を虫に食われているが、生存率は90%以上あり、良好である。報告書……FREDAにあるか?
- 生徒たちにはお昼が出るそう。おこわ弁当だった。我々はポダビンゼイ村でごちそうになる。ここは前回も来た家だ。名前は……。「ちびまるこ」のおじいさんの「ともぞう」に似ているので、かつてにともぞうさんとよぶ。子どもさんは4人おり、一人はすぐ前に住み、残りは大学に進んでいるという。こざい豊かな感じの家だった。
- 美知子さん、三輪はキンマの葉っぱにくるんだカミタバコをかねて、口の中を真っ赤にした。
- 食事後、ウキンユウさんの個人の植林地を見に行く。水路の奥に入った場所を開いて、立派な植林をしている。本業はココヤシ、水田など農業だが、マングローブの植林に意欲を燃やしている。
- ウキンユウさんの苗床には、植林が難しいといわれるヘリテリアホメス(ミャンマー名カナゾウ・日本名サキシマスオウノキ)が育てられている。植林の可能性は高い。
- ウキンユウさんの別宅でお茶をごちそうになる。竹とニッパで作った家は涼しくて快適。こんな別荘が欲しい。ウキンユウさんは1991年の戦闘で負傷し家をおわれてボガレーの近くから一家で移ってきた。13年でこれだけの規模の農業をはじめた。大変な苦労人で人格者だ。
- 帰りは、陸路走って帰るつもりだったが、遅くなったのでそのままボートで帰還。



1 2月4日(木)

- 朝食前は各自、村々を散策、あるいは調査
- アシェイ・ピア(far east end の意味)に11時到着。この村はもう海に近い。オッポクインチャンからは一番遠い村だ。竹のすのこで作った魚干し場あり、村中が干し魚のにおいがする。前に来たときには水浸しの村だったが、今回は乾いている。この臭いで「ああこの村だ」と分かる。
- もともとはもっと海に近い水路沿いにあったのだが、沿岸流のために水路がふさがれ、舟の出入りができなくなって、村ごと内陸に数キロ移動したという。
- もともとの村を見に行ったが、遠浅の砂浜海岸になっておりもとの村の面影はない。(案内されたところが本当の昔の村だったかどうか、今考えると怪しいのだが)
- 来年から新たにマングローブ植林地を広げようとしているUser group の代表の方の家で食事をごちそうになる。(主人は40歳代後半だったが2004年2月亡くなった)
- 庄子さん、美知子さん スタッフのナイレンタの妹に会う。三輪、中山は茶店で甘いコーヒーでくつろぐ。
- 小さなネコが飼われている。向後さんは台ばかりを持ってきたので、ネコの体重を量る。1.5kg程度しかない。
- アシェイ・ピア村ではウペイの近くで、さらに広い面積(72エーカー)のマングローブ植林を計画している。その支援を求められる。意欲的な人たちである。
- 他の村もまわる予定が、時間がオーバーでそのまま帰還。遠いので真っ暗になる。舟はライトをつけないので、危険な感じがする。彼らは目がいいのだろうか？
- 夜は向後さんのスライド会。向後さんの来し方がわかるいいスライドだった。

1 2月5日(金)

- 朝食前、オポクインチャン村の調査
- かなり遠いタマインパレ村に行く。パレは首飾りの意味。昨日のコースをたどる。両岸はなじみ深い景色だ。海に近い場所ではこれまでの土色の水から、緑色の水に変化している。
- タマインパレ村は、はじめての村で、これまでは植林をしていない。今回マングローブ植林を計画しているので、その視察である。
- 桟橋から少し内陸にはいと、広々とした水田にでる。現在稲刈り中である。柳田さんによれば収穫量は日本の4分の1ぐらいだという。海に近く塩分もほかより濃いのでその影響もあるのかもしれない。この水田が永続的に使えるか不明だが、見た目には豊かな感じのする農村風景である。



さんによれば収穫量は日本の4分の1ぐらいだという。海に近く塩分もほかより濃いのでその影響もあるのかもしれない。この水田が永続的に使えるか不明だが、見た目には豊かな感じのする農村風景である。

● この村でもマングローブ植林をしようと計画しているのは、水田の先行きを心配しているからなのだろうか？ 水田を取り囲むマングローブ林は巨大で立派だ。ここのマングローブ林は、この地域ではもっとも大きい。伐採されなかったからだろう。

- 巨大マングローブは20m近くある。

アビセニアオフィセナリス、エクスコカリア・アガロチャなどの木が大きく育っている。伐採しなければいい防風林にもなるし、間伐材を薪炭林に使うこともできる。このマングローブはいい。

- 学校見学に行く。わかい先生はアマの出身で、マングローブのエッセイを書いて入選したこともある女性だ。賞状はオンさんが手渡したそう。二人とも久しぶりの再会を喜んでた。
- 生徒たちに地図で、ミャンマーの位置を尾探してもらったが、わからない。まして日本の位置などわかるわけがない。ここの学校はUNDPの援助でできた。こざれいと感じはよいが、集落からかなり離れているので通学には不便だ。
- 世界的なランナーの中山さんがいるので、帰りはアマとセイマをむすぶハイウェーを走ることにした。美知子さんも一緒に行くという。カナチュイン村で舟を止めてもらい、そこからテビンゼイまで10キロほど走る。テビンゼイまでは小さいボートで迎えに来てもらうことにした。
- 走る人は三輪、中山、寛の3人、ヌーヌースエとウインウインが自転車で道案内、伴走してくれる。自転車は1台しかないの、ヌーヌースエは授業中の学校に行き行って借りてくる。どうやって返しに行くのだろう？
- ココヤシの林の中を快適に走る。30 あるので少々暑い、足下が快適なので気分はずこぶるいい。30分ほどで、ニボアテ近くのハイウェーにでる。この道は前回雨の中を走ったところだ。一度自分の足で通ったところはよく覚えている。道幅は10メートルほどある。しかし車が通ることは全くない。
- ニボアテのウチョウエンさんの家の前で、先に行ったウインウインが手招きをする。レモンジュースをごちそうになる。彼は健康センターの元所長さんで、リタイア後はマングローブ植林をやっている方だ。
- 途中からウインウインも草履履きで走り始めた。彼らにとって走るというの、どういう意味があるか聞いてみたい。村の中で走っている人などいないのだから。
- ワコンからの道に合流し、テビンゼイの学校林の近くまでボートドライバーのウインモウモウが迎えに来てくれた。

12月6日(土)

- 朝食後、手こぎボートで近隣の散策。3隻の小舟に分乗してテビンゼイに向かう。周りはすべてニッパヤシの植林である。ニッパヤシはこの辺では大変有用なマングローブで、燃料にもなるし、屋根や壁材としても使われている。ニッパを編んで屋根材にする仕事はこのあたりでは重要な現金収入の手段である。
- ニッパの実実は椰子の実ほどあり、堅くてゴツゴツしている。割ると中には白くナタデココみたいなものが入っている。淡泊な味がする。売っている。



- ボートは岸边まで近づけるので、ニッパの花の写真を撮ることができた。なかなかおもしろい形だ。
- テビンゼイを往復し、オッポに曲がるまえに細いクリークにはいる。こちらには舟はほとんど来ない。向後さんの泳ごうか？の声に、すぐさま美知子さんが答える。さすが農大探検部だけのことはある。私は多少躊躇していた。ワニがいるかもしれないのだから。しかしみな水浴びの誘惑には勝てず、次々に水にはいる。水着をもってこない庄子さんもロンジーで水泳。案外深く、背はたたない。流れがあるので舟に捕まったりしながら流されていくのは気分がいい。ニッパヤシの陰に隠れた柳田さんが泥団子をぶつけてくる。子どもに帰ってはしゃいだ時間だった。
- 午後はオッポの宿舎にもどる。各自それぞれの興味にわかれて、村へ入る。それらの報告は別紙。三輪は栈橋で水位の測定。満月の2日前なので、潮差はおおきいはずだが、2 m 2 5 cm程度だ。三輪はこの観測を夜 1 1 時まで続ける。そのあとはソネラチアの開花を観察。コウモリが花を食べるのを写真にとろうと試みるが、デジカメはタイムラグが大きく、その瞬間のシャッターチャンスを逃す。中山さんは10枚ぐらいはとれたと満足そうだ。
- 本日がOak-Po Kwin Chang のキャンプの最終日。お世話になった人たちに感謝！

12月7日(日)

- マインマハラ島は現在は無人島だが、古い寺院がある。そこにはもとボクシングの選手だった坊さんがいる。おさるの寺と向後さんが説明してくれる。
- パゴダの裏手にウッシンジをまつるお堂もある。民間の精霊信仰をお寺が守っているというのもおおらかで不思議だ。11時。35.5℃、暑い。
- オンさんはお寺に寄進するが、娘さんから預かってきたので、領収書をもらう。お坊さんも慣れたものだ。お布施をして領収書をもらうのはなかなかいい。
- お寺への道は長い。前回は工事中だったが、まだ完成していない。道の両側にはアカンサスが繁っている。このアカンサスもマグローブの一種なのだ。ちょうど花が咲いている。中山さんの出身大学の金沢大学はアカンサスがシンボルだという。
- マインマハラ島のクリークを通過して ピョンムエ島にあるFREDAの基地に移動。クリークの両側はソネラチア・カセオラリスの木が茂って美しい。花は咲いているが少ない。ピョ



ンムエ島は森林局の基地もあり、マングローブの苗木を生産しており、植林試験地も持っている。

- 一応エコツアーができるようにボードウォークや展望台作られている。展望台は15メートルほどだが眺めはすばらしい。が足がふるえる。向後さんは決して登らない。FREDAの基地から歩いて20分ほどで行くことができるのだが、途中に泥沼があり少々時間がかかった。



- ビョンムエ島のFREDAの基地は新しく快適な。周りにはまったく人家はなく、孤立しており、調査には不便である。しかしここをエコツアーの基地として使うことは、大変よいのではないだろうか。1泊しかできなくて残念。

12月8日(月)

- 午前中若者(柳田さんも)はワニ園へ。年寄り組はビョンムエ島の北端まで探検。マングローブ材の密猟者が2人。この島は保護区で一応無人島のはずだ。
- カナゾウ(サキシマスオウノキ)が密生している美しい森だ。カナゾウは板根が特徴だが、沖縄のサキシマスオウノキのような大きな板根は、この地域にはない。
- 午後 FREDAのボートでボガレーに向かう。今回はすべてのスタッフがボガレーへ。
- ビヤホールで夕食会。美知子さん庄子さんは 若者は若いスタッフと名残おしそう。

12月9日(火)

- ボガレー→ヤンゴン 国営汽船でゆっくり船旅。9時半発でヤンゴンに着いたのは日もとっぷり暮れていた。ライトアップされたシュエダゴンパゴダが美しい。
- 船の中では討論会。エコツアーの可能性。仏教と精霊信仰との関係。なぜビルマ人は親切か

生まれ変わりを信じているのか？ 人に親切にすれば自分も気持ちがいい。井戸水調査をすべきだ。病気を防ぐために。土地の人が自ら森を維持しなければ意味はない。この土地の人は幸せなのか。豊かになることと幸せと一致するか。自殺がない。引きこもりもない。それはどうしてだろうか。

- 12月中にレポートを提出する約束！(守ったのは柳田さんだけ)

12月10日(水)

- 午前中にヤンゴン大学のアウン・チョウさんとヤンゴン通信大学のネイ・ウイン・オウさんとあう。二人は日本に5年間滞在し東京都立大学で地理学の博士号をとった人である。一昨年帰国して現職に就いている。三輪、柳田さん、向後さんとはしばらく歓談。次回に共同調査を行うことをお願いする。
- 午後はFREDAのオフィスに行き、夕方はオン宅でお食事。美知子さん、庄子さんはしばらくヤンゴンに残り、研鑽をつむことになった。
- のこりのおじさん達はTG306 便でバンコックへ。そこから成田、関空へと向かった。到着は11日朝である。向後さんは、講演のために、羽田から沖縄へ。

現代ミャンマー（旧ビルマ）教育事情について

柳田 耕一

先日、マングローブ植林行動計画 略称・アクトマン向後元彦代表 のミャンマー連邦(Union of Myanmar)イラワジ流域環境調査団の一員としてミャンマー国を訪問してきました。その際垣間見た彼の地の教育事情について興味深い点がありましたので報告します。

一言で言って、今、国中で、とても教育熱がたかくなっているようです。一方、これに本当に軍事独裁政権なのと、首をかしげるほど平穏な町の表情でした。一度も戦車や機関銃を目にせず中央政府庁舎以外で軍服をみることもありませんでした。といっても、デルタ地帯に入った時は、常に一人の軍人さんが警護（見張り）してくれました。

1ミャンマー国の現況	概略(ここ11年の動 統計資料から)			
項 目	10年前	基準年	現在	基準年
< 人口 >				
国民人口 (万)	4233万	(1992~93)	5114万	(2001~02)
人口増加率	2.10%	(1980~91)	2.08%	(1993~2002)
々療度(bユ2)	62. 5人	(1992)	67人	(1999)
65歳以上率			5.1	(1997)
首都の人口	479万	(1992)	410万	(19991)
都市人口率	24%	(1983)		
< 経済 > 世界最貧国の一つ				
GNP国民総生産	163億ドル	(1990)	113億ドル	(2000)推定
同一人当り	220ドル	(1990)	300ドル	(1999)推定
経済成長率			10%	(2000)政府
貿易:輸出	約 6億ドル	(1992)	約30億ドル	(2002)
貿易:輸入	約10億ドル	(1992)	約23億ドル	(2002)
為替レート対ドル	6.10チャット	(1993)	6. 60チャット	(2002)
外貨準備高	3億1200万ドル	(1990)		
対外債務	45億5700万ドル	(1991)		
財政:歳出	172億チャット	(1993)		
軍事予算			523億チャット	(2000)
< 対日関係 >				
在日ミャンマー人			647人	(2003年8月)
在ミャンマー・日本人			5080人	(2001年12月)
対日貿易:輸出			1億2501万ドル	(2001)
対日貿易:輸入			1億8710万ドル	(2001)
日本の直接投資			2億3300万ドル	(1998~2000)

2 . ミャンマー国の教育制度 アウトライン

伝統的に仏教が盛んであるため、幼年期から修道院にいて修行する習慣があり、この習慣はいまの国中で盛んに行われている。女子が修行する修道院もある。

宗教 = 国民の 90% が仏教徒。他にキリスト教、イスラム教信者がいる。

現行の義務教育は 5 歳から 15 歳までの 10 年間。国民の教育熱は高い。識字率は高く 91.4% に達する。(内訳 ; 男性 91.7% 女性 91%) 過去に 2 度 UNESCO より国際熊字賞を受賞している。これは 1983 年から 88 年にかけて 247 の町で約 88 万人のボランティアが参加し、210

万人の文字をしらなかった大人に識字数青を行つたことが、評価されたことによる。

教育制度としては初等・中等・高等教育の3段階に分かれている。

大学入試としての制度はなく、代わりに高校卒業時に大学受験資格試験がある。

このため、最近では大きな町にはどこでも民間の学校 予備校 が開設されている。

予備校のことをビルマ人はチュウチンと呼ぶが、これは英語の tuition から来ている。

高校卒業後に進学する教育機関の数は144。

内訳 = 総合大学 59、単科大学 59。専門学校が 26、となっている。

コース別では = 教育 60、科学技術 51、保健 14、防衛 5、協同組合 4 など。

軍事独裁政権の影響か？防衛大学のうち 4 大学は総合大学となっている。 一方で
林業大学は総合大学とはいえ 1 つしかない。また日本の東大にあたるヤンゴン大学
は来年から大学院大学へ移行する予定である。ヤンゴン大学は創立 83 年目。

大学制度の特徴の一つは通信制大学が盛んであること。1992 年に首都ヤンゴンと
マンダレーに通信制の総合大学が設置され、その下に国内 24 に地域センターがあり
現在 149,076 名の学生が在籍している。この制度は特に地方にすむ優秀な青年に人
気があり、有意な人材育成制度となっている。

初等教育を初めとする学校教育全般の改良・改善を目的とした公的な祝日 毎年 1 月
3 日の School Family Day) が設けられ、それぞれの学校では、地域に対して今なに
をしているか、教えているかを伝えている。

ミャンマーでも教育 IT 時代に取り遅れまいと、政府は E-learning 推進計画を策定し、
IT 単科大学やコンピュータ技術専門学校を設置するほか、各学校に PC を導入し始め
ている。とはいえ、予算の関係で各学校 1 台というケースが殆ど。一般のインター
ネット接続もメールのやり取りはできるが、他の閲覧や検索には制限がついている。

3・実地に見た学校と教育

今回のミャンマー調査旅行では、2 つの小学校と 2 つの予備校を見学したので、写真
とインタビュー及び観察内容を報告します。

(1) アクトマンが支援してできたワゴンの村民立「小学校」

ワゴンはいラワジデルタの先端部にある小村（人口は 50 所帯 250 人）

全所帯が植林プロジェクト（社会造林）に参加している。

写真説明（ワゴン小学校でのインタビュー風景 右の人物が村長さん）

政府も州も学校建設の予算を回してくれないので、植林プロジェクト（アクトマンと現

地 NGO との間で進めている) の方をお願いして学校建設のための資材を応援してもらった。土地は私が提供し、労力は村人全員がでて昨年作った。黒板や椅子はここを訪れたスイス人が購入資金を寄付してくれた。教科書は地元の NGO が寄付してくれた。

政府や郡区長には早く公立の学校に組み入れて欲しいと要望しているが、なかなか認めしてくれない。認められると何らかの援助があると思う。今は村民がお金を出し合って、一人の先生の給料 (円換算で 1600 円) を支払っている。先生はこの近くの村の出身者でパディンの短期大学を卒業したての 19 才の女先生。彼女は月曜の朝にやってきて金曜日に家に帰っている。学校の維持のためにも施設充実のためにも学校林 (マングローブ林) を育てたい。学校の費用は、そのあがりからあてたいと思っている。

* 学校の面積は敷地が 400 m²。校舎は 80 m²。授業は毎日 10 時から 16 時まで。

(2) ママイン・パダ村

ここもイラワジデルタの先端部・水田も広がる

< 写真説明 : 向後さんの質問に立って腕を組んで答える生徒 >

先生の説明 : このような場合、腕を組むのがミャンマーでは正式な答え方です。片側の窓はありませんが、これは涼しさを確保するための工夫だときいています。教室は一つですが黒板は 3 つあります。これは先生が一度に 3 つの学年を教えるためです。生徒は普通、家に教科書やノートは持って帰りません。いつも机の中にいれて帰ります。泥棒やいたずらは殆どありません。

この学校は州が作った学校です。教えている教科には英語もあります。

(注 : 詳しい人の説明では、UNDP の予算で建設された由)

(参考) 今年の稲の作柄について農民にもインタビューしてみた。

農民 : 今年はいつもとより少し悪くて 1 エーカーあたり 2 ~ 3 バスケットでした。

ここらあたりでは肥料なんて一切やりません。作るのは年に 1 回だけです。

* 1 バスケット = 約 25 キロ つまり 40a あたり 1 重量で 50 ~ 75 キロとなる。

この収穫料だと日本と比べ 60 ~ 70 分の 1 となる。いくら塩分が高いとはいえ信じられない。植え方は種籾のばら撒き方であり、苗からの栽培ではないという。

(3) ボガレーの予備校

ボガレーは大きな町で交通と交易が盛んなところ。人口は 10 万人 (案内者談) をこえ、イラワジ州では最大の町 (英語では Township) だとか。地元には大きな市場や専門学校や高校がある。予備校の数は 15 あり、タイプも何タイプがある。従来からあるのは先生が自宅で得意の学科を一つだけ専門に教えるものだったが、最近では、複数の先生がどこか家をかり、6 教化おしえるタイプが増えている。

< 写真 : ボガレーに今年開校されたばかりの予備校 (Private School) >

先生へのインタビュー：

生徒たちはサイエンス・コースか、アート・コースかのどちらかを選ぶ。ミャンマー語・英語・数学は共通科目。サイエンス・コースは化学・物理・生物学を、アート・コースは地理・歴史・経済を別に学ぶ。授業は日曜から月曜まで休み無しで行う。朝が7時から9時まで、夕方は5時～7時まで一日2回、授業を行う。その間、生徒達はすぐ近くにある高校に通う。授業はミャンマー語以外、全て英語で行う。ついてこれない生徒はいない。

市内に住む生徒は通ってくるが、遠くの生徒はこの学校に住んでいる。当然、料金も寄宿舎こみの方が高くて、年間300,000チャット（円換算＝約50,000円）。

先生は7名で全て男性。先生は殆ど高校の先生でもある。つまり、かけもち。

<写真> 次の朝、6時半すぎに同じ予備校に写真撮影に訪ねると、すでに4名の生徒が教室で自習をしていた。顔が何だか少し化粧気味なのは、ビルマ独特の伝統的な日焼け止めタナカを塗っているため。タナカは木の幹を石臼で擦って水で延ばして使う。小さいうちは男子も塗る。

一番好きな教科は？生徒へのインタビュー

生物＝6名 物理＝4名 化学＝3名 英語・数学＝2名 歴史＝1名

進学率30%？

ミャンマーの高等教育機関への進学率を尋ねると先生は30%だと答えられた。本当ならすごいことだと思うが、確かめる資料が手に入らなかった。

ミャンマーとの呼び方には国民の反発強し。ミャンマーという国名はそもそも古い呼び名。現在の国名は軍事独裁政権が勝手に変更し国連に変更登録したため、内心では同意しつつも、手続き上も政治的にも問題が多いとしてこの表現に抵抗をしめす国民が多いと聞いた。また同じ理由でミャンマーではなく今もBURMA(ビルマは英語発音であり地元の人々の発音ではブーマ)と表現する外国メディアもある。

ビルマ国イラワジ河流域・地元住民の家屋にみるマングローブ材利用

柳田 耕一

調査主旨：マングローブのほとんどの種 92種 が分布するイラワジ河流域の地元住民の日常生活において、マングローブ材がどのように使われているかを一般住民の暮らしの中でも、換金・薪炭材に次いで使用量が多いと思われる住宅（建築）及び家具について見聞することで資料を集め、これを検討してみる。

調査時期：2003年12月1日から8日まで

（今回のツアーはアクトマン地球環境基金プロジェクトの一環としてのツアー）

目次

- 1．調査の背景
- 2．家に関する実地調査
- 3．当主及び家族よりの聞き取り調査
- 4．今回分かったこと、分からなかったこと。
- 5．次回訪問調査への視点
- 6．添付資料 写真による説明

1．調査の背景

調査対象の村：ミャンマー連邦イラワジ州テビンゼイ村区オッポ・クイン・チャン村はイラワジデルタ流域に在る林業と漁業を主な生業とする小村である。住民はビルマ族が殆どで、宗教は殆ど仏教を信仰している。世帯数177、人口は867名（2001年1月）。村の成立は1944年となっている。（2001年1月、向後報告より）

聞き取り：柳田耕一（アクトマン評議員・53歳）他に地球緑化の会（NGO、タンザニアで農村開発援助）日本環境財団（NGO、モンゴルで社会植林）、ティエラコム（ベトナムで企業貢献）活動を行う他、国内では水俣病問題や環境教育分野に関わっている。

通訳：ウィン・ウィン FRED A・42歳 ヤンゴン大学卒業後、森林省勤務。後に FRED A（NGO）に参加。出身地のマングローブ林回復に努力中。英語で訳した。村内に住む。

聞き取り家族の背景（聞き取り日は12月6日（土曜日）午後2時から4時まで）

- ・夫＝ウィン・トイン・ナインさん（37）妻＝カイン・カイン・ナインさん（34）
- ・同居家族は6名。夫妻の間には4人の子どもがいる。内訳は3人の娘と1人の息子。
- ・この家の職業は農業。10エーカーの水田を耕作し、他に貝やニッパ葉の採取販売等
- ・村の中央部に位置し、すぐ近くに店や食堂それに学校がある。
- ・FRED Aとアクトマンが進める社会林業のユーザーグループのメンバーでもある。

2. 家に関する実地調査

1. 家の位置



2. 家の広さ (この家の敷地も建家もほぼ正方形)

床面積 (建坪) = 61.1 平方メートル 横 6.6 m × 縦 9.3 m

敷地面積 = 103.4 平方メートル 横 7.3 m × 縦 14.2 m

3. 家屋の概要

建築時期 = 2002 年 4 ~ 6 月 (雨期にあたる)

敷地面積 = 103 平方メートル (31.3 坪)

建坪面積 = 61 平方メートル (18.5 坪 / 平屋)

建築費用 = 362,000 チャット (円換算 = 54,300 円)

屋根材料 = ニッパ椰子葉、壁材料も同じ 屋根は 2 段になっている。

4. 建築時の状況

村人で見知りの大工に建築を依頼し、兄弟も含め家族で手伝った。

普通は雨期に建てず乾期に建てるが、急いでいたので雨の合間をぬって作業をした。

柱材のうちユーカリ (湿地性) のみは、近くの自生樹を自分で伐採して利用した。

樹齢 10 年程度の樹だ。

屋内材のうち、玄関から入った所に敷き詰めた床板は兄弟が提供してくれたし、

衣装入れの上等なものは友人が新築祝いにくれた。

5. 建築費の概要

< 各費目の金額と構成比 >

柱や材木等 = 約 200,000 チャット (55.2%)

ニッパ屋根材 = 約 100,000 チャット (27.6%)

釘と竹結び糸 = 約 10,000 チャット (2.8%)

竹材 =	2,000チャット	(0.6%)
大工手間賃 =	50,000チャット	(13.8%)
合計 =	362,000チャット	(100%)

* 新築に伴う税金は徴収されない。

上記金額は現金で支払い、うち100,000チャット 長兄が援助してくれた。
特に新築祝いはいはしてない。

6. 家について

- ・構造 木造平屋建て
- ・屋根 ニツパ椰子の葉で細工した瓦材 2段屋根
- ・高さ 5.15m (床下から天井までの距離)
- ・玄関間口 105cm
- ・明かり窓 玄関の両脇は格子と網戸、居間の壁には窓枠があり鉄棒で格子状となっている、奥の台所と物置の壁は上部があいており、明かり取りになっている。
- ・トイレは屋内にはなかった。
- ・水利用のため敷地の入り口に大きな水がめが2つ (250リットル程度)

7. 材料について

大柱の数は20本 (直径11 ~ 16cm)

大黒柱にはアビセニア (直径12cm) が使われている。他の柱材は以下の通り。

ヘディティエラ 5本 20年生 玄関柱2本含む 地元名 = カナゾー

アビセニア・オピュシナリス 8本 (5年生) ほとんどが白ありに食われていた

ユーカリ (湿地性ユーカリ) 7本 (10年生) 他のものに比べ若くて白い

このうち丸木のままだユーカリを含め12本 他は加工され角柱6本

ユーカリ柱のうち4本は基礎にカナゾーの木が使われ、下部で接がれている。

小柱の数は26本 プルゲイラ・セキサンギラ (屋根を支える所に使われている)

棟 = 2本 梁 = 7本 桁 = 17本、これらの材は全てカナゾー。

他の材木

< 1 > 床下材

束 = 床下を支えるもので50本。高さ66cm。大きさはどれも柱ほどある。

つまりどれもマングローブ材。種は不明

ねだ = 30本 (カナゾー) 立10cm 横4cm 長さ3m程度のものが使われている。

垂木 = 70本 (大10、小60) 材はココとカナゾー

< 2 > 玄関周り

上り段 = 外から家に上がる踏み段 - 7枚 カナゾー 下台3本

玄関戸 = 主人の手作り、昼間は外しておく (カナゾー)

踏み板 = 玄関から床に続く入り口の厚い板 - 11枚 カナゾー) 兄弟が提供。

< 3 > 床板材

居間 = 39枚 アビセニア・オフィシナリス。ココの木 (地元名; 非マングローブ)

最長の床板は4.63 m (ココの木) 長さはあまり揃っていない。

夫婦部屋と食事部屋 = 30枚 ココの木 (地元名、非マングローブ)

子ども部屋とダイニング? = 28枚 ココの木と雑木

台所と物置 = 18枚 フェニックスと雑木(間隔があいている)

< 4 > 屋根周り

垂木 = 65本 ブルゲリア・セキサンギエラ

丸太 = 9本 フェニックス 竹 = 11本

屋根桟 = 132本 不明小材) 屋根板 = 36枚

屋根ニツパ = 700枚

天井板は無し

< 5 > 壁周り

外壁板 = 25枚 ココの木 格子用板 = 19枚

壁竹 = 140本 壁棒 = 5本 フェニックス

壁ニツパ = 500枚

< 窓周り >

窓枠 = 4ヶ所(1ヶ所に垂木6本)カナゾー

仏盤 = 1ヶ所(縦120cm 横144cm 奥行き92cm)着色不明材

< 外回り >

玄関板壁 = 25枚 ココ

生垣用杭 = 12本(1.4 mから2.2 m高さ不揃い)フェニックス芯

< その他・手作り家具 >

部屋仕切り用 = フェニックス6本 垂木16本 竹72本

机 = ティーク 玄関戸 = カナゾー ちゃぶ台 = カナゾー

鍋フタ = カナゾー 食器棚 = カナゾー

3. 当主よりのインタビュー(実地調査と同時に行った)

一) 敷地について 敷地は友人のものだったのを頼んで譲り受けた。しかし、ここに生えているココ椰子2本とユーカリの木は友人のもので私のものではない。

(二) 家族について 当主はこの村の生まれ。同胞は8名で末っ子(兄弟5名、姉妹3名)。父親は既に死亡。4人の兄と1人の姉は村に残り、2人の姉は外に嫁いでいる。妻は他所の出身。

(三) 家業について 年間で主な収入源は稲作。10エーカー耕作している。

(注;現状ではこの地区は政府による野生生物保護区であり、住民の稲作は禁止されており、この場合の耕作は違法耕作だが、多くの住民が行っている。)他の収入源としては、ニツパの採集や日雇い等がある。現在は妻が村内で売る貝の上りで何とかしのいでいる。家の暮らしぶりは、村内では中程度だと思う。

(通訳のウイン・ウイン氏もこの家が柑では普通の暮らしぶりであると言う。)

稲の収穫量は10エーカーで約40バスケット積れる。

(注・1バスケットは約25kg。つまりha換算だと250kgとなる)

水牛はもっていない。すべて手で作業している。化学肥料や牛糞、それに堆肥などの肥料は一切入れていない。

栽培は毎年7月から12月。植付けは苗植えではなく、もみのばら撒き法。

(四) 家計について 米の出来によるが年収は全て合わせて40～50万チャットくらい。

生活していくには、毎月3万チャットが必要。このうち最も大きいのは子どもの学校への支払い。いま3人が村の学校に通っているので半分の15,000チャットは学校に消えていく。次に要るのは食費。お米はあるが、鶏肉や他の材料・調味料代が必要。

五 家の耐用年数について 普通この程度の家なら、最低でも10年はもつ。屋根の葺き替えは2年に1回は必要。その時の必要経費はニッパ代が6,000チャットかかるが、自分で作ることもできる。

<六> 心配事 子どもは出来たら大学までやりたい。といっても、近くのパティンでも月に30,000チャットかかるし、首都のヤンゴンにやるとなれば倍の60,000チャットはかかる。これをどうやって稼ぐかを今考えているが、とても難しい。

4. 今回の調査で分かったこと。疑問に思ったこと。

(分かったこと)

- ・この家を含め、この村では家を作る際、かなりマングローブを使用している。
- ・使用されている種類は、カナゾー、アビセニア・オフシナリアス、ブルゲリア・セキサンギュラ、ニッパ、フェニックス・バルトーサ等である。中でもカナゾーヘディ・ティエラ)が、よく活用されている。
- ・材によって使う場所が、大体決まっている。
- ・経費を切り詰めるため、シロアリのくった古い材でも使用している。
- ・屋根にも床にもマングローブが使用されている。
- ・住民は簡単な家具は手作りしており、マングローブはその原料となっている。
- ・新築の際は親や兄弟からの現金での支援の他にマングローブ木材での支援もある。
- ・普通の家の新築費用はおよそ家族の年収分に当たる30～40万チャットである。
- ・新築の費用は50,000～2,000,000チャットと幅広い。高級な家の屋根はトタン葺
- ・この程度の家であれば、最低10年はもつが、屋根の葺き替えは2年毎に必要な。
- ・新築にあたっては家族や親戚、それに親しい友人が金銭や木材で支援してくれる。

(疑問に思ったこと＝不詳・不明・調査不足)

- ・この家に一体どれだけの木材量が使われているのか？面積と重量＝不明
- ・細部には、どのマングローブが、どの部分に使われているのか？
- ・全体として一体どれだけの割合がマングローブ材か？量と費用の構成比＝不明
- ・新材と古材の構成比は？ 不明
- ・地元で有名なマングローブのジャイロカルパス・モルセンシス(砲丸ヒルギ)やカンバラという名前を持つソネラチア・アピユタラ 地元名：カンバラ)は使われていないのか？そうだとするなら、それは何故か？

5. 次回の検討課題

(一) 上記、疑問点に対する詳しい調査

二) 及び新しい視点からの調査

三) この家を建てた大工さんに対する聞き取り調査

目的: マングローブ材の利点はなにか?

どの種をどの部位に使用するか?

どの種がいくらするか?

どういう順番で家を作るか等に対するインタビュー

(四) 家材の他に、地元住民は日常的に、どのような形でモノで、生活の中でマングローブを利用しているか? に関する調査.

: 農具として

: 魚具、船材として

: 商品として

: 薪炭材として

: 薬や食料として

: 生活雑具として、などを総合的な角度から聞き出す。例: 染色

手法としては

(場)・農具の話は水田や畑で、漁具は船着場や船の上で聞く

(人)・当主や男からだけではなく、性別や世代を超えて聞く

理由 = 遊び道具だと子どもから尋ねたほうが適切

(時)・雨期と乾期では生活が大きく変化するから、時期を越えて聞く

注意点

(種)・それがマングローブかどうかの区別が必要。混同をなるべくさける。

(映像記録)・実物をデジタルカメラで撮影して、後に区別・記録する。

(精神文化)・祭事、ことわざ、歌、タブー等との関連も尋ねる。

(部位)・マングローブは幹にこだわらず、枝、種子、葉、根などの利用についても細大漏らさず聞き取る。

6. 写真説明 (別添)

(提出日: 2003 年 12 月 21 日 柳田耕一)

ミャンマー滞在記

寛 美知子

1. はじめに

今回このミャンマーへの旅に行くことになったのはほんの些細な出来事からでした。農大探検部のOBである向後さんが、OB総会後の親睦会の時に部の先輩に、女の人の席がひとつ空いているからと誘いをかけてくれたのですが、先輩は行けないということなので私が行けることになりました。(当の向後さんはお酒の席のことなので全く覚えがないようで、それにもかかわらず参加させて頂き、また急な手続きをして下さったACTMANGの須田さん、どうもありがとうございます。) 前々から外国へ行きたかったのがこれはなかなかないチャンスだと思い、何をしに行くのかほとんどわからないまま即決しました。今自分が生きている環境とは全く異なる場所でミャンマーという国に触れることが出来、また日本での生活をあらためて考えさせられたりと収穫のある旅になりました。レポートらしからぬ報告ですが、どうぞご了承下さい。

2. 行動日記

11月29日(土)

夜中の3時まで準備をするが何か忘れ物がありそうで不安である。朝6時に家を出ると、部活の仲間3人が見送りにきてくれた。朝早いのにありがとう！新宿駅で山上さんと待ち合わせ、成田空港へ。山上さんはのどを痛めていて大変そうである。機内で麦わら帽をかぶった三輪さんと赤いザックを背負った中山さんと合流する。二人ともランナーで、中山さんが隣だったので色々話を聞いた。シルクロード(西安～イスタンブール)まで221日を走ったそうだ。しかも一人で！トライアスロンや大会を度々海外で走ったりしているそうで、三輪さんは三輪塾や地平線会議をやっているそうだ。なかなか濃いメンバーである。機内食はグリーンカレーで和菓子付き。バンコックはとても立派な空港でやなぎ田さんと合流。現地時間の19時に到着し、ライトアップされたシュエダゴンパゴダに連れて行ってもらう。上の方のダイヤモンドが角度によって色の見え方が変わり綺麗である。ホテルに着き、こんな立派なホテルが中級なんてと驚きながら向後さんの部屋で交流会。山上さんはマングローブのことを勉強したくて参加したそうだ。同じ大学の同じ学科にいたのに、お互い今回初めて会ったのだ。やなぎ田さんは



3ヶ月座り込み運動をしたり、NGOで各国を回っているそうだ。皆普段の生活ではなかなか出会わないような人たちで、面白い旅になる気がする。睡眠不足のため途中から睡魔に襲われながら…。さて、明日からどんな旅になるのだろう。

11月30日(日) 快晴

朝食を食べながら、昨晚向後さんから言われた、数日滞在を延ばして二人で回ってみたいら？という提案を実現させるにはどうすれば

良いか考える。問題は12月14日から入っているバイトだけである。日本に電話出来れば何とかなるかもしれない。山上さんの方は日本に課題を幾つか残してきているそうで、残れることになるといいのだが。そんなことを考えているうちに港に着き、Bogalay行きのガバメントボートに乗る。外国人旅行客は私たちだけである。港や船内で赤い唾を吐き捨てる人を度々見かけたが、石灰をつけたキンマ(コショウ科)の葉にピンロウジュの種子を包んだものをチューイングガムのようにかむ風習がアジア全般に見られるそうだ。Bogalayの町の感じは好きだなぁ。



12月1日(月) 快晴

8時40分にBogalayを出発し、専用ボートでOak Phy Kwin Chaungへ向かう。途中、現地の女性や子供たちが日焼け止めとして顔や手首に塗っているタナカというものを顔に塗ってみた。塗り方がうまくいかず厚塗りで怖い。B12時30分頃到着し、お昼まで周辺を散策。タナカのせいかわりに皆に注目されてしまう。昼食は焼きそばみたいな麺とスープ。とても美味しい。それにしてもなんて立派なロッジなのだろう。普通の人にはなかなか入れない地域と聞いていたから、質素な感じを想像していたのでこの綺麗さには驚きである。少し休憩を取った後、聖なる木(ソネラシア アピタラ)と名付けられた巨木を見に行った。色々な国の人々が木に神の存在を重ねるのもわかる気がした。帰りは歩いてロッジに向かうが、またしても奇怪な目で見られている気がして早く顔を洗いたくなった。シャワーを浴びた後夕食までくつろぎタイム。おつまみを食べ、夕食もとても豪華で食べ過ぎてしまった。

12月2日(火) 快晴

今日も朝から暑い。ミャンマーの暦を教えてもらった後ボートでマングローブの植林地へ。土の状態によって倍位成長が違うそうだ。それにしても日差しが強すぎて痛い。2000年に植林したところからまたボートに乗り次ぎの植林地へ行く。あの支柱根は多いほど呼吸で苦しんでいるとのこと。そうなのかぁ。次にワコンへ行き、小学校でココヤシを頂いた。ココヤシの実には歯ごたえのあるゼリーみたいでおいしい。そういえば、ココヤシって何か健康に良い成分は含まれているのだろうか。南国の果物だからビタミン類だろうか。今日のお昼は今までで一番おいしかった。そしてまたしても苦しい(笑) Ohnさんに「みちこさんなら何を教えてくださいませんか?」と聞かれ返答に詰まってしまう。私が出来ることって何だろう。今の自分に足りないものはここなのかもしれない。





自分の得意分野とか専門分野みたいなものを持ちたいと切に感じた。その後所々観察しながらデビンゼイへ向かう。夜、Ohnさんに良い話を聞いた。「Reading Writing Speaking」 its make you perfect man. Ohnさんやスタッフの人たちと話す時、もっと英語が話せ理解出来たらなぁと何度も思った。よし、日本へ帰ったら毎日英語をやろう！やなぎ田さんの話にも驚いた。大学1年のとき、本250冊・映画200本を目標にして達成したそう。うーむ、すご過ぎる。大学生活残り2年。どういう

風に過ごすか考えなくては。夕食後、皆で今にも花が咲きそうなベニマヤブシキ(ハマザクコ属)のつぼみにカメラを構えて観察していると...咲くまさにその瞬間を見ることが出来た。咲く前に何度かこうもりが寄ってきていた。外部からの刺激を受けて咲く花らしい。こうもりは何故咲く寸前のつぼみに寄ってくるのだろうか。花粉を食べるのか、蜜を吸うのか謎である。

12月3日(水) 快晴

そういえば昨日トンレイが私と中山さんが採ってきたアヴィセニアマリーナとツノヤブコウジの幼木を植えてくれた。Thanks. このFREDAのスタッフは皆とてもいい人だなぁ。私も穏やかで魅力的な人になりたい。今21歳。この大学時代は自分を成長させる大切な時期だよね。もっと大学生活を有効に使わなくては。そんなことを考えながら今日の目的地に向かった。今日は植林したマングローブの苗木がどれ位生存しているかを、現地の中学生と一緒に調査する予定だ。到着してボートから出るととても暑い、暑すぎる。B気を取り直して一人一列の苗木を数えた。干からびているような土地で苗木に葉が数枚しかついていないが、こういう所でも育つものなのだなぁ。ミャンマーの小学校や中学校の制服は緑のロンジーに白いシャツだそう。やなぎ田さんは苗木の長さを一本一本測っている。3ヶ所の植林地で調査をした。私は2ヶ所目からpHメーターを使って測っていたのだが、一つの土地でこんなにも値が変わるものなのかと驚いた。土壌とpHの関係など、どういうのが正常だとか良いpH値なのか全くわからなかったのだが、そういう知識を持って調査したらまた違う感動があるのかもしれない。お昼はともぞうさんの家で。(ちびまるこちゃんのおじいさんに似ていることから私達がそう呼んでいた。) とてもおいしい。そこで現地の人がよくやっている、噛んで赤い唾を吐き出しているkunwardeを体験させてもらった。渋みが強いが、噛み終わると口中がすっきりしてなかなかよかった。帰る途中、1991年の暴動で移動してきたという家族の家に招かれお茶をご馳走になった。15歳の男の子の肩には銃弾で撃たれた傷があった。今まで見えなかったミャンマーの歴史の一面を見た気がしたのだが、この国の歴史や情勢をほとんど知らない為、それは薄っぺらなものに感じた。今日は帰り道を走って帰る予定で自転車まで用意してくれていたのだが、時間が遅くなり中止。帰りのボートの上でヌーヌースウェとミャンマー語と日本語を教え合った。こんな風に語学を覚えるっていいな。

今日の二言。「Small is Beautiful」(by シューマツハ) 「もうこれで 十分という精神を

持たないと21世紀に未来はない。これからは精神的なものが重要になってくる。」どちらも考えさせられた言葉だった。

12月4日(木) 快晴

朝起きて村を散歩する。子供たちが朝ごはんとして買っているカウニパウと呼ばれているおこわとガビョウディモウ(バナナケーキ)を買った。どちらもおいしい。今日の朝ごはんもおこわで売られているのとはまた違うがとても美味です。今日はボートでの移動時間が



長い。Asha phia という港町に11:00に到着。ここは来年からマングローブの植林を始めようとしている村で、代表の人達が集まっての話し合い。その間私たちは村を散歩した。お昼をご馳走になった家はかなり裕福なのだろう。大きく伸ばした子供の写真や高価そうなおもちゃがいくつもあった。日本も貧富の差はあるけれども、そうははっきりと目に見えてはいない気がするが、こちらではその差があまりにも大きく感じる。今回私たちはお客様としてもてなされ、食事とても豪華だが、普段一般のミャンマーの人が食べているのはどんな食事なのだろうか。豪華な食事もおいしくてうれしいけど、もてなしじゃない一般の生活も味わってみたかった。この村から帰る途中でナイレンタの妹さんに出会った。とてもかわいらしい人で私と同じ21歳だった。本当はあと3つの村を訪問する予定だったがもう15時である。 私たちのために海岸まで連れて行ってくれた。この海岸は、元々はマングローブが繁殖していたそうだが潮流の変化により地形が変わってしまったために砂浜になってしまったそう。海岸には流れ着いたゴミが散乱しているところが多いがここは全くゴミがないなあ。もう時間がないので帰ることになったのだが、夕日を見ながらのボートはすごく良かった。クリークの両岸に牛糞みたいなものがたくさんあったがニツパヤシの根だったとは想像もつかなかった。19:30位から向後さんによるスライド上映会。ヒマラヤ時代からの写真は、若き日の向後さんや向後さんの家族、今まで行った所ややってきたことが垣間見れて面白かった。ただ、途中で睡魔に襲われて寝てしまった。

12月5日(金) 快晴

今朝は寒くて目が覚めた。部屋の温度計を見ると18度。昼間の気温がいつも35度位だから寒く感じるはずである。朝食前に村を散歩していると少年にバドミントンを誘われてやってみた。Bogalayでもバドミントンをしている子供たちを結構見たし、ボール(シンロウ)蹴りの次にポピュラーなスポーツなのだろうか。ボートに乗り出発して少したってからシューズを持ってくるのを忘れた事に気付いた。私としたことが！今日は15km走る予定なのに。

パゴダがどこもみなきれいなのは上から塗り直しているからだそう。それにしてもミャンマーの人はよく働くなあ。私も見習わなくては。Ohnさんは毎朝・晩3ヶ国語のニュースを聞いて、それぞれが違うことを言っている中で情報を収集しているそう。74歳、感服である。

ここのトメイインパーレという村では米を栽培していたが、日本のように並べて植えるだけ



で収穫量が大幅に変わるそうだ。日本は10 a 当たり8表(1表60kg)、ここでは10 a 当たり12 ~ 18kg、日本の約4分の1である。 15:20から走り始める。ヌーヌスウェとウィンウィンが自転車で付き添ってくれた。途中休憩してレモンジュースを頂き、17:45にTebinzeikに到着。ミャンマーで、しかもこんなのかな風景を眺めながら走れてすごく気持ち良かった。三輪さん・中山さんとも走れて楽しかったなあ。三輪さんの走りは、あれはプロ級だよね。帰ってきて川で泳いで

みたが川底がぬめっているのがちょっと気持ち悪い。夕食後に外に出てみると皆が集まっていた。トンレイはダンスがすごく！上手いし、ルインモモは手品系が上手いなー。私も何か特技があったらなあ。よし、日本へ帰ったら楽器を習おう。ミャンマーのダンスいいね！今度ミャンマーに来る時までには絶対 英語、 歌or 楽器、 何か、を身に付けよう。探検部やっぱり辞めようかなあ。

12月6日(土) 快晴

朝食前の散歩であの男の子を発見。瞳が印象的だなあ。今日は土曜日で学校は休みなのでカウニパウを買いにくる子供がいない。スラムキンというココナッツから作られたお菓子を買って食べてみたがすごくおいしい。朝食後、手漕ぎのボートに乗せてくれるということで、ボートを漕ぎに出かけた。簡単そうに見えて、私にも出来そうと思いきやとても難しい。途中で向後さんが泳ぎ始めたので続々と皆も泳いだ。向後さんは泳ぐのが好きだそうだ。そうなのかあ。午後からはそれぞれがテーマを決めての調査。私はヌーヌスウェに通訳を頼んで物価調査することに。これは単語も覚えられるしなかなか面白い。調査をしていたお店で、トンレイのお兄さんの奥さんのおじいさんという101歳のお年寄りに会った。なんか親戚が多いなあ。この調査、かなり熱中して3時間があっという間に過ぎた。村の人とも交流できて楽しい調査になった。夕食前に、隣の家のおばあさん(スタッフの家族か親戚だと思われる)に、ニツパヤシの葉で作った鳥の飾り物の作り方を教えてもらった。子供たちが4~5人いたのだがとても無邪気でかわいい。明かりは電気ではなくろうそくで、その感じがすごくいい雰囲気だった。夕



食の時、やなぎ田さんに「いつも同じ席で頭固いんじゃない？」と言われ頭にきたけど当たっている気がしてくやしい。でも言ってくれるってことはありがたいよね。言われないとわからないことや気が付かないことって多いし。同じ人とばかりつるんでないで新しい世界に足を踏み入れろってことだよね、きっと。と、勝手に解釈。

シダ シェンカイデ！(足 かゆい)

12月7日(日) 快晴

5:00起床。星を見るために外に出てみると、星がたくさんでている。流れ星を3つも見ってしまった。願いがかないますように B今朝は2度目のおこわと瓜のから揚げ。これがおいしいんだなあ。お坊さんが一人で住んでいるという島へ行くがそれはなさそうな気配。11:00現在35.5度、今日も暑い。ピョンム工島でオヒルを食べた後、台所のある所でマンマーの数字を教えてもらったり、談話したり楽しいひととき。その後マングローブ林の散策をしたのだが気持ちの良い林だった。15m30cmあるという塔に登った。いいですねー。ロッジに戻ったら夕日が沈みかけているときですごくきれいだった。そこで三輪さん・中山さん・山上さんと色々話した時、マンマーの事情やOhnさんの話を聞いた。うーむ。複雑なんだなあ。夕食前に山上さんと日本へ帰ったときのことなどを話し合った。部活辞めたら少しの間寂しいのかもしれないけど、そこから自分でまた切り開くことが大切かなあ…。日本での今の悩みは部活だー。夜外に集まって、つどい。ルインモモは面白いなあ。どうしてこんなにいろいろな芸が出来るのだろう。

12月8日(月) 快晴

早朝に星を観察。もう少し早いほうが良かったらしい。今日はワニが飼育されている島へ行った。あれ、なんでワニを飼育してるんだっけかな？戻ってから昨日行ったタワーへまた行くことに。ヌーヌースウェと話しながら、明日一緒にBogalayで買い物をする約束をした。今日はBogalayに泊まって明日はヤンゴンへ。この旅もそろそろ終盤だあ。せめて2～3日マンマーに残れることになるといいんだけど。昼食の後にOhnさんが好きだというアボガドジュース(アボガド+牛乳+コンデンスミルク+砂糖)を飲んだがすごくおいしい！作ってみよう。15:00にBogalayに到着し、私は物価調査を一人でやってみることにした。Oak Phy Kwin Chaungで調査した食品や雑貨をマンマー語で聞いた。「ジャヒンガン ベラウレ(にがうりいくらですか?)」マンマー語で話しかけると最初驚かれて、とても親切に教えてくれた。理解できないことも多かったのだが。市場では大勢の人に囲まれてびっくりしたけど、皆やさしい目をしていて「ガゼ！(50K)」とか「ティヤ！(100K)」と口々に言ってくれてうれしく楽しかった。夕食はFREDAのスタッフの人達も交えて皆で食べることになった。最後の日ということだからだと思うけど、始めから一緒に食事をしたかったなあ。食事を一緒にするってすごく大きなコミュニケーションだと思うけどな。でも色々複雑なのね。夕食は量が多すぎてたくさん残ってしまってホントもったいない。夕食後、誰の家かは忘れてしまったけど家に招待してもらい、簡単な日本の歌を教えて一緒に歌ったり、マンマーの踊りを教えてもらったりした。12歳の女の子がマンマーの水祭りの踊りを披露してくれて感激！指の動きとかまですごく細やかな素敵な踊りだった。マンマーの子供たちは学校や親戚の人におそわって、だいたいの人が踊れるそう。うらやましい。スタッフの人達は昨日私たちの食事の準備などのためにほとんど寝ていないそうで、とても疲れているのにこんなにモチベーション高く、感謝・感謝である。





12月9日(火) 晴れ

朝食前に散歩をしていると中山さん・ヌーヌスウェ・ナイレンタに会い、お茶を飲みにお店へ。甘いけど紅茶がおいしい。実はヌーヌスウェとナイレンタは結婚するそうです！おめでとう！！朝食後はヌーヌスウェと一緒に土産を買いに行った。指輪やブレスレットなどプレゼントしてくれてすごうれい。こんなに色々良くしてもらって、私たちはスタッフの人たちに恩返し出来ている

のだろうか B船の出発時刻が早まったそうで少し急いで船着場へ。危ないところでした。さあ、これで現地スタッフの人たちとはここでお別れです。みんなすごく親切で私達のために細かいところまで気を配ってくれてありがとう！！ところで昨日からお腹の調子がおかしくて今日も痛い Bけどおいしいので食べ過ぎてしまう。ヤンゴンに着くと、デッキから人がたくさん飛び乗ってきて少し怖い。人の多さに、やっぱり首都は違うと感じた。

12月10日(水) 晴れ

今日は7:00に朝食を食べて部屋で11:30までごろごろ過ごす。タイ航空に行って13日の夜の便を取ろうとしたら空席がなくてキャンセル待ちに。取れなかったら15日の朝に帰国である。お昼を食べに街を歩いていると、フルーツやお菓子、洋服などが露店でいたるところで売られている。ピザパンを買ったが甘くてちょっと……。私と山上さんはミャンマーに残るので他の人達は荷物を車に積んでFREDAのオフィスに向かう。そこでレッドグレープフルーツをご馳走になり(かなり美味)、また向後さんのスライドショー。前回寝てしまって見れなかったところがみれて、またちゃんと見る事が出来て良かった。その後Ohnさんの家に寄らせていただき、数種類のおこわまでご馳走になってしまった。お孫さんたちにも会うことが出来たのだがとてもかわいかった。Ohnさんもととてもかわいがっている様子である。空港に到着して、向後さんたちを見送る。明日からは自分たちだけのヤンゴン観光。ちょっと不安もあるけどすごく楽しみ！それにしてもあいかわらずお腹の調子が悪く、今日は体がだるく気持ち悪い。なんか病気になるんじゃないかと結構心配 B明日に備えて21:30就寝。

12月11日(木)

本当なら今朝成田に着くはずがまだミャンマーにいます。腹痛が辛いよー。今までも毎日暑かったけど街中の暑さはまた違う暑さを感じる。いつの間にか背中が汗びっしょりになっている。山上さんと二人で市場などを見て回った。日本人の女の子だけにいるから色々な人に話しかけられる。日本語をしゃべれるのは勉強したからなんだろうなあ。そんなに日本人が来るのだろうか。夕方もう一度シュエダゴンパゴダへ行った。そこで、人々がお祈りしている中に座って夕日が沈んでいくのを眺めながら1時間くらいぼーっとしていたのだが、ゆったりとした気持ちになってとてもいい時間だった。そういえば、今日2度も財布を落としてしまった。一回目は落としてすぐにおばさんが拾ってくれて無事だったのだが(おばさんありがとう!!)、2回目はさすがに駄目でした。いやはや2度も落としてしまうとは、他の国だったら危

ないんじゃないかい？私。でもそんなこともあるかもしれないと思って、財布には今日使うくらいのお金しか入れず別のところに分けておいたので無一文にはならずにすみしました。うーん、それでももっと注意深くなるう。

12月12日(金)

今日は一人で回ってみることに。私は相変わらずお腹の調子が悪いので午前中はホテルで休み、アウサンマーケットでお土産を見て回った。Ohnさんに電話で14日の朝ヤンゴンを発つことを知らせると、朝ホテルの前まで車をよこしてくれるそうで、最後までほんとこんなにありがとうございます。



12月13日(土)

今日は日本人旅行客が多く利用していて情報交換ノートが置いてあるというTokyo Guest Houseに行きたいと思い、地図を片手に一人で出かけた。だが途中でどう行けばたどり着くのかわからなくなってしまい木陰で地図を見ていたら、ポストカードを売っている少年に「どこに行きたいの？」と話しかけられた。最初はなんか警戒して大丈夫、と言って違う木陰に行ったら、さっきの少年がまた来て「一緒に行ってあげるよ」と言ってくれ、騙すような感じでもないのと一緒にいてもらうことにした。歩きながら話を聞くと、平日は学校に行き、休みの日にポストカードを売って稼いでいるそうだ。学校で英語を習っているそうだが15歳でこんなに話せるなんてすごいなあ。とても親切で、さっきはあんなに警戒してごめんね。何人かは忘れてしまったけど兄弟が多くて、皆休みの日は彼みたいに稼ぎに出歩いているそうだ。子供も収入の手助けをしているんだらうなあ。目的地の前でお礼を言って別れ、中に入ってみようとしてみたが、2階にあってどう行けばいいのかわからない。近くのお店の人に尋ねてみたが、私の英語が通じないのか結局わからずじまいでそこを去った。いろいろ見たり、一人でお茶を飲んでみたり！しました。また道がわからなくなったものの、英語が話せるお店の人に聞いてよく知っている道に出て安心。英語ってほんと重要。ホテルで山上さんと合流し、夕食は露店でチャイニーズヌードルを食べました。

12月14日(日)

7:30にFREDAの運転手さんがホテルの前まで来てくれて、Ohnさんのお宅に向かう。Ohnさんの若い頃や家族の写真をを見せてもらった。うーん、人の人生って不思議だなあ。本物の木のタナカを頂いてしまいました。空港まで見送りにきてくれて、お礼を言って、これでミャンマーの旅は終わりです。

3. 現地調査

ミャンマー国内における価格調査 (Oak Phy Kwin Chaug)

目的 : 現地で食品や生活品類がどれ位の値段で売られているかを調べる

方法 : Oak Phy Kwin Chaug にある 4 つの店で Nu Nu Swe さんに通訳してもらいながら聞き取りをした。(正確性に聞き取れているか定かでない品目もあります。)

品目	値段 (K)	円価格 (円)
お茶 (レパウチャ)	70~80 (小)	9.8~11.2
	150 (大)	22
コーヒーMIX	70	9.8
袋菓子	50	7
ビンジュース	80	11.2
米麺 (チャーザン)	250	37
白米 (サン)	200~300/8カップ	30~45
餅米・白 (カウニーサン)	320~400/ "	47.8~60
餅米・赤 (")	320~350/ "	47.8~52
赤豆 (ペロン)	70/1カップ	9.8
じゃがいも (アル)	25~40/ *	3.5~5.6
玉ねぎ (チャトン)	80~90/ *	11.2~12.6
にんにく (チャトンピューム)	80/ *	11.2
赤とうがらし (チャ)	120~140/ *	17.8~20.6
ししとう (ユーディセイ)	80/ *	11.2
キンマの葉 (コン)	200~260/ *	30~38.4
大根 (モンラウ)	70/ *	9.8
トマト	50	7
うり (クワディ)	40	5.6
にがうり (ジャヒンガン)	40	5.6
なす (クイヤンディ)	50	7
バナナ (ガェビョディ)	200 (一房)	30
ココナツ (オンディ)	680~800	101.2~120
卵 (ペウ)	40~45	5.6~6.3
葉タバコ (セレイ)	5 (小)	0.7
	15 (大)	2.1
タバコ	100・120・160・	15・17.8・23.4
	180・280・300・500	26.2・41.2・45・75
線香 (モエダイ)	20~40	2.8~5.6
ろうそく (ペヤンダイ)	120~180	17.8~26.2
タナカ	70	9.8
サンダル (ペナ)	500	75
麦わら帽子 (カマ)	350 (小)	52
	500 (大)	75
ロンジー	1000~2500	150~375
ほうき (デピヤシイ)	500	75
ボートの漕ぎ板 (ロウトッブ)	500	75
サッカーボール	800	120
ボール (シンロウ)	300~350	45~52
ねずみ取り (チュエパナ)	300	45
はさみ (カチ)	200	30
ボールペン	100	15

オッポクインチャン・ボガレイ・ヤンゴンの3ヶ所で調査して比較しようと思ったのですがきちんと調査できたのはオッポクインチャンだけでした。日本とは物価や生活水準が違うので、日本円はあまり関係ありませんが、日本円だといくら位なのか知れたら面白いと思い載せてみました。(注) * は単位が不明

4．終わりに

ずっと外国に行きたいと思っていて、ミャンマーに来てみて変化したことは何だろうか。一番は、日本での生活をもっと大事にしようと思ったことだと思う。こんなに恵まれてありとあらゆるものが手に入り、大学という多くの時間が与えられている環境にすることが出来るのは幸せというか何というかなんと贅沢なのだろう。日本で何も考えずに過ごしていた訳ではないけど、もっと、もっと有効な時間の使い方をしたいと感じた。部活・バイトも勉強になるけれど、違うかたちの勉強(例えば読書など)をして自分の知識や人間的教養を身に付けたい！と何故かそんなことを感じた旅でした。日々是勉強・日々是前進を目標にして。(と、こんな大きなことを書くと後で恥ずかしいかも。)

最貧国と言われているミャンマーでさえ首都はあんなにも発達しているのだからタイなんて私の想像を超えているのかもしれない。私はボガレイみたいなミャンマーで在り続けて欲しいと思うってしまうけど、それは外の国に暮らす者の自分勝手に、その国の人にしてみれば先進国のような豊かさを望むのは当然であろうか。世界のある地域だけが発達して行く訳もなく、後からどんどんついて行くものなのだろう。これからのミャンマーを見ていきたいです。

今回一緒に行った日本のメンバーの方々皆とても魅力的な人達で、学ぶことがたくさんあり、この出会いに感謝！です。(もちろんFREDAの方々も。) 約十日間、どうもありがとうございました。

Oak Phy Kwin Chaung における農家調査

山上 庄子

12月6日の午後の時間を利用して私たちはそれぞれのテーマを決めて、調査を行いました。私のテーマは『農家調査』です。まさに大学で勉強していることであり、とても興味があります。やはり、ここで暮らす人たちの生活を見たいと思い、そのためには農家に話を聞くことが最も良いと思いました。どのように農業で生活が成り立ち、どのようなサイクルになっているのか、3件の農家に話を聞くことができました。ここで、1つの視点として、学費に注目してみました。日本の大学は、信じられないくらい学費が高く、私の家庭でも学費はかなり大きな支出源になっています。私自身、学生のため、ここは注目すべき点だと思いました。おそらく、収入によって学校にいけないケースもたくさんあるはずです。

【ダッピーイの家庭】

ダッピーイは、私と同じ20歳です。フリーダスタッフの一人であるトンレイの友達で、ギターを弾きながら歌を歌う姿が印象的でした。彼の服装は、ロンジーではなく、ズボンにジージャン、帽子も麦藁帽子ではなくて、スポーツキャップです。とても、都会的な格好で、周りの仲間と比べてみても、かなり違った感じでした。村の中でも、裕福な方だということがよくわかります。彼の家は、Rice farmer です。主に二種類の米を作っています。また、ビアホールとビリヤードもやっています。

< 家族構成 > 6 人家族

父 (4 7) ・ 母 (4 6) ・ 兄 (2 2) ・ ダッピーイ (2 0) ・ 弟 (1 9) ・ 弟 (9)

- ・ お兄さんは、ミャンマー人女性と結婚していて、現在タイで働いているそうです。娘が一人 (おそらく 2 歳ぐらいでしょう) いますが、彼女はここに残っています。ダッピーイがお父さんのように可愛がっています。
- ・ ダッピーイは、バティン大学の学生です。大学へ行くのは、一年間のうち 4 月から 9 月の 6 ヶ月だけだそうです。彼の年間の学費は 300,000K です。
- ・ 19 歳の弟は警察官になるための学校に行っています。年間の学費は 200,000K です。
- ・ 9 歳の弟は小学校 4 年生で、Bogalay の学校に通っています。そのため、今はボガレーに住んでいるおじさんの家に滞在しています。年間の学費は 100,000K です。

* つまり、学費だけで年間 600,000K の支出が考えられます。

< 稲作 >

ダッピーイの家では、“コンワ”と“カウチー”という二種類の米を作っています。カウ



チーの方が質の良い米です。田植えは7月、収穫は11月から12月で、一期作です。もちろん農薬や肥料は使用していません。収穫した米は、当然自分たちでも食べますが、主にOak Phy Kwin ChaungとBogalayで売ります。Bogalayまでは、父親が自分のボートで運ぶそうです。値段には大きな差がありました。

コンワ	8 カップ	4 カップ	1 カップ
Oak Phy Kwin Chaung	2 0 0 K	1 0 0 K	3 0 K
Bogalay	3 0 0 K	1 5 0 K	3 5 K
カウチー			
Oak Phy Kwin Chaung	3 0 0 K	1 5 0 K	3 5 K
Bogalay	4 0 0 K	2 0 0 K	5 0 K

確かに、彼らの説明ではこの値段だったのですが、コンワのBogalayでの値段とカウチーのOak Phy Kwin Chaung での値段は、1 カップ 35K なのに、4 カップ 買うと 140K のはずが 150K と、何故だか高くなってしまふというおかしなことになってしまいます。コンワのOak Phy Kwin Chaungでの値段の設定が最も理想的な増え方だと思いますが、完全に私の注意不足でした。このデータは目安にしかありません。ただ、コンワとカウチーの差、また、Oak Phy Kwin Chaung とBogalay での差は、かなりはっきりしています。

労働者を雇うわけでもなく、自分たちで全てやっているようです。

*この稲作によって、年間約 1,500,000K の収入が得られるそうです。

< ビアホール >

Bogalayからビールを仕入れて売っているようです。一杯 1,400K のビールを仕入れ、1,500K で売っているため、一杯あたり 100 K の利益を得ることができます。一日に約 20 杯売れるそうなので、一日のビールによる利益は約 2,000K。よって、一ヶ月で 60,000K、一年だと 720,000K の利益が得られると考えられます。

< ビリヤード >

ここにあるビリヤード台は、一年前にバツェインという町で 600,000K で手に入れたそうです。このビリヤードによって、一日約 1,000K の収入があるのだそうです。よって、一ヶ月で 30,000K、一年だと 360,000K の収入になると考えられます。つまり、約二年でやっとビリヤード台のもとがとれることになります。今はまだ一年目なので、年間の収入からは除いて考えてみました。

< まとめ >

(1ドル = 800Kで換算)

・稲作による収入・・・1,500,000K (1875 ドル)

・ビアホール収入・・・720,000K (900 ドル)

年間の収入・・・2,220,000K (2775 ドル)

・学費による支出・・・600,000K (750 ドル)・・・収入の約 25% にあたる。

*残りの 1,620,000K (2,025 ドル) で一年間生活していると考えられます。月々約 169 ドルの計算になります。実際には二年に一度の屋根の付け替えや、修理などもここに含まれます。ま

た、この収入で現在、タイの兄夫婦と Bogalay の弟を除き、兄の娘を含む5人が生活しています。この5人で一日約5.6ドルなので、単純に計算しても一人当たり1ドルちょっとです。やはり、この村のなかでは、かなり余裕のある裕福な家庭だと感じました。

【マチチセーさんの家庭】

彼女は、小さなお店と、マングローブの一種でもある *Nypa fruticans* (ニッパヤシ) のオーナーをしています。ニッパを栽培し、加工し、町へ運び、売ります。これも、マングローブを利用したひとつの農業です。私は、このような農家もあるのだなぁと、とても興味をもちました。私は、マングローブそのものだけでなく、その地域の人々の生活、どのようにマングローブと関わり、利用し、共存しているのかということにも興味があります。今回その1つの例を見ることができたのではないかと思います。ここで暮らす人々にお話をうかがうと、ニッパヤシは彼らの生活の中で最も身近なマングローブの1つだということがよくわかります。それを利用しているというのは、この地ならではの農業を見ることができたと思います。マチチセーさんの紹介の前に、このニッパについて少しまとめておきます。

< *Nypa fruticans* (ニッパヤシ) >

- ・最もよく見られたニッパの利用法のひとつで、屋根材があります。Yangonではあまり見られませんが、Bogalay、Oak Phy Kwin Chaung、Tebinzeik、など、このあたりの村では、多くの一般民家でこのニッパの葉でできた屋根を見ることができます。おそらく、25～30枚の葉で1シートできるのですが、実は、Tebinzeikで私も一枚作らせてもらいました。葉はかなり頑丈で、形は笹の葉に似ています。細く切った竹を芯にして、葉を重ねてはさんでいくのですが、その留め方を私は作ってみて初めて知り、感心してしまいました。爪楊枝のようなもので、安全ピンのように留めていくのですが、それも実はニッパヤシの葉の芯の部分を利用していたのです。一枚一枚葉を重ねていくと同時に、その葉の芯の部分を爪楊枝サイズにボキッと折り、その葉を留めていくのです。つまり、このシートに使われているのは、竹とニッパの葉のみということになります。無駄がないというか、知恵だなぁと本当に感心しました。ちなみに、家族四人程度で住む小さな家一件で約1,500シート使用するそうです。葉は年に一回収穫し、真ん中の一枚を残しておけば、また増えることができるそうです。
- ・フルーツはずっしりと、とても大きく、赤茶色っぽい色です。外見はパイナップルを思わせるようなゴツゴツした形ですが、中はライチのような、白い果肉でほんのり甘くておいしいです。また、樹液からは砂糖や酒もできるそうです。
- ・葉の付け根の真ん中の芯は細い柱や firewood、つまり薪にも使われているようです。
- ・ボートで移動していると、川に面してたくさんニッパ林を見ることができますが、これが、防災林の役割も果たしています。強風、高波や洪水から民家を守るという重要





な存在でもあるのです。(チーウィンさんのお話より)では、マチチセーさんの紹介へ・・・

<家族構成> 4人家族

マチチセーさん・夫・妹(15)・

妹(13)

・15歳の妹は店を手伝っているため、学校へは行っていません。昼間は、マチチセーさんと、この妹で店番をやっているようで、私が行った時もこの二人がいました。

・13歳の妹は7年生で、Tebinzeikの学校へ行っ

ています。彼女の年間の学費は100,000Kです。

<ニッパファーム>

彼女は、30エーカーのニッパフィールドを管理しています。ニッパは基本的に葉のみを利用し、屋根材に加工して Bogalay、Yangon へ運び、売っています。ニッパの収穫・加工は12月～4月(5ヶ月)で、4・5月に町へ運びます。彼女はオーナーなので、彼女や彼女の家族は実際にはやっていません。あくまでも管理のみで、20人の労働者を雇っています。

女性(15人)・・・竹とニッパの葉を使ってシートを作る、加工専門の仕事。

一人あたり日給500K。

男性(5人)・・・男性は、ニッパを切る役。つまり、収穫専門。

一人あたり日給700K。

一日の労働費： $(500K \times 15人) + (700K \times 5人) = 11,000K$ ・・・一ヶ月：330,000K

・収穫・加工は5ヶ月だけなので、労働者を雇うのも5ヶ月の計算になり、労働費全体としては： $5ヶ月 \times 330,000K = 1,650,000K$ の支出になる。

・1シーズンで約500,000シート加工します。シートは、大小二つのサイズがあり、半分ずつ、つまり250,000シートそれぞれのサイズに加工します。

大シート 7K： $7K \times 250,000 \text{シート} = 1,750,000K$

小シート 5K： $5K \times 250,000 \text{シート} = 1,250,000K$ 合わせて3,000,000Kの収入

・これらの加工したシートを Bogalay、Yangon へ運ぶ。これにも労働者を雇っている。費用は、行き先、大小関係なく1シートあたり1Kです。よって、運搬費は500,000K。

おそらく労働者といっても、村と町との間の運搬を専門とする職業があり、マチチセーさんだけでなく、村中から集められたニッパシートをまとめて運んでいるのでしょう。

・つまり、実際には大シート6K、小シート4Kで売っており、労働費も考えると、さらに低い価格になります。単純に計算しても、1シートあたり3.3Kの労働費がかかるため、結果的にマチチセーさんの利益は、シート一枚あたり大は2.7K、小は0.7Kということになる。

*ニッパファームでの収入は、

$3,000,000K \text{ (ニッパ卸値)} - 1,650,000K \text{ (労働費)} - 500,000K \text{ (運搬費)} = 850,000K$

・ちなみに、Bogalay、Yangon でのニッパシートの値段。カッコ内は、それぞれの町で商人が得る卸値と売値の差額、つまり一枚あたりの利益を示した。

	大シート	小シート
Bogalay	10 K (3 K)	8 K (3 K)
Yangon	13 K (6 K)	11 K (6 K)

この結果から、BogalayとYangonでは、商人の利益に二倍の差があることがわかります。また、私はニッパオーナーであるマチチセーさんが最も利益を得ているのではないかと考えていましたが、実際、町に住む商人の方が高額な利益を得ているのです。

< Oak Phy kwin Chaung の店 >

彼女自身でこの店を管理していて、品物は全てBogalayから仕入れているそうです。だいたい一日あたりの収入は2,000 Kです。単純に計算して年間約 720,000 K の収入。

品物は、主に食料品です。どこにでも見られる甘いフルーツのお菓子やスナック、駄菓子や野菜、フルーツまで売っています。

< まとめ >

- ・ニッパファームによる収入・・・850,000 K (1,063 ドル)
- ・商店による収入・・・720,000 K (900 ドル)
- 年間の収入・・・1,570,000 K (1,963 ドル)
- ・学費による支出・・・100,000 K (125 ドル)・・・全体の約 6.4%にあたる

*残りの 1,470,000 K (1,838 ドル) で一年間生活していると考えられます。一日およそ5ドルで家族4人が生活していることになり、一人当たり1.2ドルと、この家庭も、かなり安定的な生活なのではないでしょうか。

ニッパシートに使われている芯の部分の竹は、どこから、どのように、いくらで手に入れているのか、など、聞き逃している部分がいくつかあるという反省点があります。もう少し注意深く聞いておくべきだったなあと、後になっていろいろ気付かされます。

この農家では、労働者の話がでしたが、実はミャンマーではこの日雇い労働者が多いということを知り、本を読んでいて知りました。その本では、稲作農家の話の中で農業労働者について紹介されていました。田起こしの準備のための「雨期雇」、雨期に牛の世話をする「中間雇」、稲刈り・脱穀など収穫のための「乾期雇」(これは男女共に)、また女性向けには田植えのために雇われることもあります。この労働者について調べてみると、より一般的な生活を知ることができるかもしれません。

【サザさんの家庭】

サザさんのところは、畜産農家です。とはいっても、規模はかなり小さく、学費による支出はありませんが、収入源は、ここで世話している豚と鶏のみです。

< 家族構成 > 3人家族

母、サザさん(22)、弟(20)

- ・父親は、すでに亡くなっているそうです。
- ・サザさんと弟は、二人とも学校には行っていない。



・男手は20歳の弟のみということになります。

<畜産>

彼女のところには今現在、母豚1匹(2才)、子豚6匹(数ヶ月)、ニワトリ30羽がいます。この母豚は2才で60kgです。ちょうど、このぐらいのサイズ(60kg)になると、肉として売りに出すそうです。6匹子供がうまれていたので、1年あたり3匹売りに出せると考えられます。この、豚とニワトリの肉はOak Phy Kwin ChaungとTebinzeikで売られます。売場所関係なく、値段は同じです。

豚・・・1000K/kg ニワトリ・・・900K/kg

豚:3匹×60kg×1,000K/kg = 180,000K

ニワトリ:30羽×900K/kg = 27,000K よって、207,000Kの収入。

また、卵は1コ40K。一日あたりの収入は平均して1,500Kなので、年間540,000Kの収入になる。

<まとめ>

全収入747,000Kからコスト10,000Kを引いても737,000K(約921ドル)です。

一日、2.6ドルで家族3人が暮らす計算になります。一人当たり、0.8ドルと、他の2家族に比べると、やはり低くなります。家もとても小さく、豚を飼育しているスペースもかなり狭かったです。(おそらく普段はほとんど外に放しているのでしょうか。)ここから、学費を出す余裕はないでしょう。また、この家庭についても、質問内容が不十分だったので、あまり正確なデータではありません。豚一匹をそのまま売り出すのか、誰がさばくのか?飼料としてこういったものを与えているのか、それはどのようにして手に入れているのか?そのあたりも、詳しく聞いてみたかったことです。

【農家調査まとめ】

今回は、半日だけで行った簡単な調査でしたが、私自身とても興味があったため、やっていて、おもしろかったです。中でも、マチチセーさんがやっているニツパファームはこの地独特

の農業を見ることができ、良かったです。こうして、村全体の家を一件一件まわって話を聞き、1つの村を見るのもおもしろそうだなと思いました。ただ、どの家にも、より確実に話を聞こうと思ったら、必ず一回ではなく、最低でも2回以上は同じ家庭を訪ねることは、重要なことだと強く感じました。再度、内容を確認したり、一回目に行った後、自分でまとめてみると、必ず聞き足りない部分や、疑問点がでてきます。今回も、そのことで、とても悔しい点がいくつかあります。

この村には、他にどのような仕事があるのか、例えば漁業はどうだろうか、知りたいこと、調べたいことが次々にでてきました。

それから、調査とは関係ありませんでしたが、ダッピューイのところでお話を聞いていると、あなたに会わせたい人がいると言われ、みんなに支えられながら奥か



ら一人のおじいさんが出てきました。年齢は90歳を超えていました。おじいさんは、植民地時代に日本軍とかかわりがあったようで、日本語のいくつかの単語をポロポロと言ってくれました。その姿を、みんなは優しい顔でみつめていたのが印象的でした。みんながおじいさんを囲んでいるのを見ていて、うれしい気持ちになりました。

この調査で協力してくれたのは、FREDAの現地スタッフの一人、トンレイ(22)でした。彼は快くひきうけてくれ、英緬辞典を片手に(私は電子手帳を片手に)ついてまわってくれました。ここまでスムーズにできたことは、彼のおかげだと思います。

Bogalay

この町は、Yangon から Oak Phy Kwin Chaung へ行く際、経由する少し大きな町です。そのため、ここには行きと帰りに一泊ずつただけでしたが、私の中ではとても印象に残る、好きな町でした。

ミャンマーに着いた次の日の朝、私たちはBogalayに向けて、木造の大きくて立派な船に乗り込みました。ベッドのついた部屋に、なんて贅沢なのだろう・・・と、最初はかなり驚きました。ところが、出港してしばらくすると何よりも贅沢なものに気づかされました。まず、私はこんなに大きな川を生まれて初めてみたのですが、その真ん中を大きな船で突き進んでいく時に見える風景は、今でも目に焼きついています。目に入ってくるものに余計なものは一切なく、目を通して体全体に伝わってくるものが、緊張を取り除き、とても気持ちの良い時間が流れてきました。川づたいに広がる村は、遠くから見ると、ヤシなどの栽培種が頭をのぞかせているので、すぐに確認することができます。近くによると、高床式の家が次々に現れてきますが、造りはあまり丈夫そうには見えませんでした。雨季に川が増水した時には、いったいどうなってしまうのでしょうか。このあたりでは、ほとんどの家がこの高床式になっていましたが、地面は水分でかなり不安定な状態になっているのではないかと心配になってしまいます。

船内では、コンワーデー(キンマの葉に石灰を塗り、ピンロージュの種子を包んだもの)を噛み、赤い唾を飛ばしている人が目につきました。この光景は、この後普通に見られるものでしたが、私は始めて見たのでとても驚いてしまいました。実はこの数日後、昼食をいただいた Padauk-pin seik で私もこのコンワーデーに挑戦してみましたが、とにかく渋くて、口の中が真っ赤になり、次第に痺れてきました。みんなはこれをいつも噛んでいたのかと思うと信じられません。少し面白い体験でした。

この船は、途中2ヶ所で止まり、その度にたくさんの物売りが乗り込んできました。フルーツ、揚げ物、カレーのようなもの、アイスもありました。売っているのは、ほとんどが子供で、食べ物は女の子が多かったように思います。このときに大きな声を張り上げ



ながらお盆を頭にのせた女の子たちは、私たちを警戒したような目で見ていました。9日後、Yangonへ帰る船でも同じ女の子たちが乗り込んできました。私たちはよく覚えているし、彼女たちにしてみても、外国人はとても印象的だったのでしょう。お互いにアーと言いながら、笑顔になって、わけのわからない言葉を交わし、うれしくなっていました。

Bogalayに着いたのは4時ごろでした。まず、向後さんから今回の目的を告げられ、20ドルを16000Kという大金にかえてもらいました。この町の印象は、とても良かったです。やはり、Oak Phy Kwin Chaungと比べると、物はたくさんあり、生活のしやすい環境だと思います。私の印象として、物があふれていくと、事件などが増え人間同士の距離も少しできてしまう気がしていました。ここでは、道を歩いていると、顔見知りの方はすぐに声をかけあい、わきあいあいとしています。朝は早くから音楽が流れ、とても活気のあるにぎやかな町においしそうな食べ物やたくさんの人でにぎわいます。夕方になると、今度は学校から帰った子供たちがサッカーやたこあげをして遊んでいるところをよく見かけます。そういった部分から、なんて豊かなところなのだろうと感じました。

ここでも、顔見知りになった人とは、帰りに来たときにもお互いに覚えていて、楽しい思いをしました。この旅の中でフリーダスタッフの皆さんがいくつかのミャンマー語を教えてくれたので、帰りの方がコミュニケーションをよくとれました。この人たちとずっと話したいから、言葉をもっと覚えたいという気持ちが強くなりました。

ミャンマーに着いてから、ここの人たちの格好にも興味がありました。私は、ロンジー、ソウリ、タナカを買いました。ロンジーは、その場でおばちゃんが、足踏み式のミシンを使い私が選んだ布を筒状に仕上げてくれました。タナカは、Oak Phy Kwin Chaungへ向かうボートの中で塗ってみることにしました。女性と子供が塗るもので、日焼け止めや化粧の役目をするそうです。柑橘系の木で、特に樹皮の部分に効果があるそうで、ペースト状になったものと、木そのものと両方買いました。最初は自分たちで付けたので、顔中に塗りたくってしまい、今考えると、恥ずかしくなってしまうほどひどい顔だったことでしょう。



ヌーヌースエやリンティンさんの奥さんに塗ってもらった機会があったのですが、人によって塗り方は様々でした。ヌーヌースエは頬に丸く塗ったり、葉の模様を写したりしていましたし、リンティンさんの奥さんは歯ブラシのようなブラシを利用して模様を出していました。二人とも、ペースト状ではなく、木を石で搗って使っていました。こちらの方が一般的なのでしょうか？また、このタナカには不純物が入っていないようです。私は以前アトピーだったことがあったのですが、こういった自然のものはうれしいなと思いました。向後さんのお話でも、以前アトピーのひどい人が来たが、Oak Phy Kwin Chaungに行ったら良くなったという例があるそうです。なるほどなぁと私は納得してしまいました。近代病というのでしょうか、私は都会がどうも体に合わないようで、山形でいくら暑い中農作業を毎日続けても、寒い中

雪かきをしていてもなんともないのに、渋谷などに一日いると、その夜は、とてもひどい偏頭痛など、体の調子が悪くなってしまいます。ミャンマーへ行く前には、声帯を痛めてしまったらしく、声がでなくなってしまうことがありました。ところが、ミャンマーに着いて何日か経ち、ふと気づいてみると、そんなこと忘れていたくらい、すっかり治ってしまっていました。やはり、生活のベースの部分である環境の影響は大きいなと強く感じます。



Bogalayは現地スタッフと別れた最後の場所でもありました。最後の夜にリンティンさんの家で歌や踊りをしました。そこで、ナイレンタさんが、「しょうこ、このお金で明日の朝、好きなものを買ってきていいよ」と、10センチほどの札束を渡されました。最初はびっくりしましたが、私はすぐにそれが以前本で読んだ廃貨であることがわかりました。ここではとてつもない大金であったであろうこの札束がただの紙として存在していることが、とても生々しく、この国の一面を見た気がしました。

Oak Phy Kwin Chaung

12月1日から7日までの約一週間をこのOak Phy Kwin Chaungで過ごしました。最も滞在期間の長かった場所です。実際にはここからいくつかの村や植林地へ出向いたのですが、マングローブに囲まれたここでの生活は毎日たくさんのマングローブに出会い、とても新鮮な気持ちになりました。私がこれまで見たことのあるマングローブは、沖縄にある、ほんの一部分でした。ここで私が興味をもったのは、このマングローブがたくさんある地域だからこそ見られるであろう、マングローブと人間の関わりです。社会、村、学校、個人、など、関わり方は様々ですが、私の中では新しい部分でした。日本では、マングローブはこういうものなのです…守らなければいけないのです…といった、どちらかというと、人間との関わりというよりは、もっと独立した存在のように思えました。

さて、ここで、とても印象に残っているマングローブといえば、Sonneratia caseolarisです。(ミャンマーネームはラムと言っていました)フリーダのボートのすぐ横に一本あり、すぐに見にいけることができるため、最高の観察場所でした。このベニヤマブシキの花がものすごく美しいという話を、行きの飛行機の中で三輪さんからうかがっていたので、私はとても楽しみにしていました。この日から、私は毎晩夕食の後にこの花を見に行くことを楽しみにしていました。私が確認できる限りでは、一日だいたい3～4個の花が咲いていま





した。二日目に見た開花の瞬間は、本当に見事でした。おしべのはじける瞬間は、花粉がこぼれ、音が聞こえてきそうな気がしました。この花を咲かせるコウモリについても、おもしろい点がたくさんあります。ある1つのつぼみに注目してみても、開花する前に約15回は飛んできました。そのうち、つぼみにかぶさったのは7～8回です。またコウモリは、この一本の木をひとつひとつの花やつぼみに止まりながら一周していました。今日咲く花、昨日咲いた花をしっかりと知っているのでしょうか。ま

ず、昨日咲いた花に止まったと思うと、今日咲く花に飛び移ります。止まっている時間はもう開いてしまった花の方が長いように感じました。きっと、開いた花を目的としているからでしょう。花の蜜を目的としているのでしょうか。現地スタッフは、誰に聞いても、Eatingだと言います。次の朝、ボロボロになっていた花を見ると、なんだか食い散らかしたようにも見え、食べているのかなとも思えました。そういえば、ピョンムエイ島へ向かう途中にベニヤマブシキがたくさん密集しているところがありました。これまで見た場所とは全体の色や感じが違っていたのですが、ベニヤマブシキの花が美しく咲きみだれていて、とてもきれいでした。静かな印象の場所でした。

毎晩ボートの横で花を探していると、フリーダのスタッフが集まってくるようになりました。私はそこでいろんなことを教えてもらいました。ミャンマーの踊り、歌、言葉、などです。昼間にメモを取ったノートを見せると、マングローブの学名をミャンマーでの呼び名にかえてくれたり、数字や挨拶、あと、本で読んだことのあるお祭りの話も聞きました。

いつの間にか、ここでの時間がコミュニケーションの場にもなりました。みんなも、日本のことを聞いてくるようになりました。

日本を離れることで、いかに自分が日本のことを知らないかということに気づかされます。相手の国の文化を知ることで、その違いを知り、ああ、日本ってこういうところがあるのか・・・と実感することは多かった気がします。文化は、その国の魅力がよく現れているところがあると思います。だからこそ私も自分の国のことをたくさん知りたいという気持ちは強くなりました。

BogalayからYangonへ帰る船の中で、インド系の顔をした、かわいらしい女の子に会いました。彼女の学校の先生は、英語を話す先生のように、彼女自身、英語がとても上手く、私にいろんなことを話しました。日本を知らないようで、私は簡単な地図を描いて見せました。彼女からの質問で「Japan is happy? Japan is very happy?」という言葉が一番印象に残っています。正直、何と答えて良いのかわかりませんでした。私は、ミャンマーへ行って、とても幸せな気持ちになり、ミャンマーに魅かれていました。むしろ、日本よりミャンマーでの生活に魅力を感じてしまいました。そんな中、日本は不景気だし、あまり良いニュースは聞かないし、Happyな国なのかな?と考えてしまいました。

そのとき、自分はいくらミャンマーが好きになっても、日本人であって、自分の国に対してもっと関心を持ち、悪いイメージがあるのなら、これからの世代である私たちが変えていかな

いといけないのでは・・・と思いました。

彼らのように、自信を持って自分の国の文化を紹介し、こういうところが好きだと、言えるようになりたいです。

最後に私とみちこさんは、帰国を延期して、Yangonに残ることにしましたが、やはり都会だけあって全く違う国へ来てしまったように感じました。どこの国でも同じことが言えると思いますが、その差はすごいと思います。BogalayやOak Phy Kwin Chaungでは全く見られなかった物乞いも多く、時間は慌ただしく過ぎ、東京を思い出させました。このままいくと、日本のようになっていく光景を想像し、なんだかやりきれない気持ちになりました。このまま変わらないでいてほしいなあと、勝手なことを思ってしまいます。この人たちがどんな生活を望んでいるのかが、一番大切だとは思いますが、素敵な部分まで変わっていってしまうと残念だと思います。

出発前、私のこの国に対するイメージは、軍事政権だし、とても恐く、治安の悪い国でした。しかし、行ってみると、そんなことは忘れてしまうくらい、ここの人々の魅力を感じました。私たちが出会った人がそうだったのかもしれませんが、Yangonの町でもいろんな人に親切にしてもらうことができました。彼らにはその行動に特別な意味もなく、そういう人たちなのです。たまたま、自分はなんて小さな人間なのかと恥ずかしくなってしまいます。そういった意味でも、私にはとても豊かな国に映りました。

ミャンマー A C T M A N G プロジェクト調査の参加報告あれこれ

中山 嘉太郎

目的 A C T M A N G 指導のもとミャンマーにある NGO の READA の手で植林されたマングローブ地域の観察と地域住民等の調査

調査地域 ミャンマーのボガレー県オボクインチャン村周辺

日程 2003 年 11 月 29 日日本出発→ 12 月 11 日帰国

現地滞在 11 月 29 日～ 12 月 10 日

成果と感想

1．ワゴン村のマングローブ生育調査と村人との対話

時期が乾期だったこともあり比較的植林地帯に簡単に行けたことは幸運だった。大きな川のデルタ地帯には自分自身初めての立ち入りだったので移動がすべて船といういい経験もさせてもい有意義でした。我々の移動するマングローブ植林地帯が事前に草刈りなどしてあったが、自然のままの（草木が生い茂っているような）状態でもいいと思いました。

学校が即席の対話集会場所となったが村のリーダーらしき人物がデータを片手に話しはじめたのは住民と FREDA の関係がうまくいっていることを物語るように思いました。

現地の住民は多くが雨期でも水に埋没しない地域に住居を構えるので、そこには椰子の木がたくさんあった。船から見える椰子のある地域周辺が集落というのがすぐわかった。その椰子の実を採る現場を見せてもらったがスルスル登るさまはすごいひとことでした。

2．小学生と共に植林後約4ヶ月の定着状況調査

4ヶ月前に植林した地域の生育調査をした。この調査は地元小学生と現地で落ち合って実施した。21人の小学生と引率の先生2人が参加したが既に先生と FREDA で話し合いが持たれたのか、我々との会話はなかった。小学生も進んで参加している雰囲気はないように見えたので少し残念だった。

このようなマングローブ定着率調査は実施していないと聞き（今回が初めて）驚いた。また定着率 98% とか 75% という数字に一喜一憂しない意識改革を期待したい。

3．小学校訪問と植林意識

ある村の小学校を訪ねた。いきなりの訪問だったのでとても面白い出会いになると思ったが、同行者のウォンさんが偉い元役人のため本来の面白みがなかった。小学生も先生も普段の顔を見せなかったのかあまり笑顔はなかった。また小学生が日本の位置を知らなかったのは残念だった（知識がないというのではない。日本の同じくらいの小学生でミャンマーを知っているのは稀だと思う）。

ところで周辺は稲作で生計が立てられるためかあまり小学生がマングローブ植林のことを知っているようすはなかった。近くにはマアングローブ植林地帯と自然林地帯が隣接しており教育的にいい土地柄なのだが。

4．地元の植林篤志家キンユウさん

苦しい時代を乗り越えて新たに自分の住む地域を開拓しマングローブ植林に懸けているキンユウさんの姿には見ていて感動すらする。願わくは家族や同志たちが利益を生むような(会社のような)形態を指導していくことも、ACTMANG や FREDA の仕事のように思いました。

5．元マングローブ成育地帯の荒廃

アングマン海に面した砂浜にマングローブの大木の枯れた株が存在するのは、地元民にとってやるせない地域かもしれませんが、土地の歴史を知らない私にはいい風景のところでした。また学問的価値もないかもしれませんが「何故? どうして?」一瞬にして海水にさらわれたかを知りたいです。

6．オボクインチャン村滞在

オボクインチャン村に滞在した日は朝一番で欠かさずに村に出向いた。ほぼ毎日食べたのがバナナの葉にくるんでもらったおこわ(もち米のご飯)。椰子の白い果肉と塩入のゴマをまぶしたおこははうまかった。学校へ行く前の子供たちも店に買いに来ることが多かった。村内で家の中や個人を写真に撮ったが、カメラを向けても怒ることもなく少し拍子抜けするくらい驚いた。もっとプライバシーを見られたくないという感情を出してもいいように思いました(日本もその昔はここで私が見たまんまのミャンマーと同じだったかも知れませんが)。第一印象から私が出会った人たちの中ではラオスの人たちに似ている気がします。肌の色の違う人間を(私のこと)ジロジロ見ることもなく、普通に接するのはいったい何なんでしょうか? ?

7．マイマラ島滞在

マイマラ島にある FREDA の新しい宿舎(ホテル?)に一日滞在した。定住しているのは、サル寺の坊さんだけというこの島は比較的自然のマングローブが育っていた。植林した地域には落ちた無数のマングローブの種子から芽が出ていた(約30cmの大きさ)。その幼木はいずれ絶えるということだったが、植林に利用できないかと思ったのは私だけだろうか。徒歩約20分のマングローブ観察タワーに登った。目にやさしい緑の景色、適度のいい風、危険はなさそうなので次回はゆっくり昼寝でもしたいです。

8．砂州地帯約20kmのランニングと遊泳・ポーと漕ぎ

エラーワディーでのランニング20km

一年を通して陸で、雨期でも水の被らない地域にハイウェー(?)が通っているので三輪先生の指導のもとランニングを計画し実行しました。参加者は三輪先生と寛さんと私の3人。付添いでウィンウィンとヌーヌースエが自転車に乗って付いてくれたのは嬉しかったのですが、少し過保護だと思いました。

夕暮れまで時間もなく、時間を気にしながらのランニングはゆったりしたミャンマーでは似合わないの、次回はもっと時間を取って一日あちこちを中走りたいです。さてランニングで最初の椰子の木の間を走るのはとても気持ちよかったです。どっか(日本)の排気ガス吸いながらす

るランニングなどとは違い、瞬時にモルヒネ様物質のβエンドルフィンがガバガバ出てきたように思いました。俗に言う「ランナーズハイ」です。その後続くハイウェーも砂で固めた道路の為足へのショックもいい具合に軽減されてよかったです。約10km走ると休憩場所をウィンウィンが先回りして設定してくれたのは過保護と思いながらも感動しました。ただ我々の単純な遊び心(自由に管理されずにあちこちへ寄り道しながら走りたい)を現地の彼らに理解してもらおうというのは今回のような短期の交流では無理のように思いました。約20km楽しいエラーワディーのランニングでした。ところで三輪先生は速いのはいいのですが、一緒に走った箕さんが私より速いのは何故?? 悔しい!!

15:20出発→15:50ハイウェーへ→16:34～50Kyawaye 宅で休憩→17:30交差点左折→17:45テピンゼイ着

8. 宿舎近くの水路での遊泳・ボート漕ぎ

到着当日の夕方? 蝸cさんが宿舎前で泳ぎはじめた。水はもちろん濁っていましたがあまり汚さは感じませんでした。ただ集落の排水も当然混じるわけで推薦できる程いい遊泳場所ではないでしょう。とはいえ水泳は好きなので私もトライ。しょっぱい水の中で夕涼みがてら泳ぐのは気持ちよかったです。FREDAのスタッフも数人が汗を流すついでに泳いでいたので、ここで泳ぐのは異常な行動ではないと思います。ただ、船の行き来が暗くなってからもあるので、月のない夜の遊泳はやめた方がいいかも。そんな時は星空観察が最適です。低い位置ですが南十字星も見えましたよ。

後日ニッパヤシの生い茂る水路でスタッフと共に皆で泳いだのは楽しかった。この辺りはニッパヤシなどの切り株やトゲがあって足場を慎重に選ばないと危険です。本心はマングローブ林が消滅したあのアングマン海を見渡せる砂浜で泳ぎたかったのですが。

ボート漕ぎは現地では子供でも出来る生活の手段だ。そこで私もあの独特の漕ぎ方にチャレンジしました。櫂(カイ)を交差させて前のめりに漕ぐ方法の다가最初は流されてまったくボートの方向を定められなかった。だが20、30分も汗をかくとそこそこに漕げるようになった。結果時間はかかるが宿舎とテピンゼイ村の間を往復できるくらいの漕力がついた。ひっくり返っても危険はないのでおもしろい、こんな体力勝負の遊びは新鮮だった。

9. 「ソネラチア・カシオラリス」の開花瞬間とコウモリ観察

宿舎のFREDAの敷地内にあるソネラチアに花が付いていた。その花を指して「この花は夜咲く瞬間にコウモリが来る」という向後さんの解説に心をくすぐられた。もちろんその瞬間を見たいからだ。こういう持続的なことなら自信があるので、その夜からカメラを構えて瞬間を待った。コウモリが絡まないソネラチアの開花はタイミングよく全員で観察できた。雄しべが一本一本開くさまは感動ものだった。花粉の一つ一つもポロポロとこぼれるのは、特に夜だったので光に照らされた中でいい光景を目に焼きつられた。

さて次にコウモリが絡むであろう開花しそうな花を見守った。もちろん日本の参加者全員だ。ところが、ひとりふたりとビールに惹かれて宿舎に戻った。狼狽と待つこと狼狽不得手らしい。すぐにひとりになって、私は心が弾んだ博pⅠ写真に撮ろう狼Ⅱ。また私のカメラはデジカメでない為にほぼ狙った瞬間を捕らえられる利点があった。結局当日の夜を含めて、ソネラチアに

絡んでいるコウモリの写真十数枚を撮りました。その後は山上さんが夜のふけるのを忘れて観察していました。ところで絡む瞬間の写真は見たことがないと向後さんが言っていたが・・・、世界初か???三輪先生も「欲しい」と言っていたので差し上げました。ここにその写真を掲載します。

コウモリがとまった



10 . FREDA 関係者の調査

このたびお世話になった FREDA スタッフ 12 人とその他の関係者 3 人の名前など知り得た限り報告いたします（敬称は略）。写真と説明を別紙 1、2 に添付いたしました。

11 .. 宿舎周辺マングローブMAPと学名

マングローブについて、いの一に観察できる宿舎前のマングローブの名前を調査しました。ただ時期が 2003 年 12 月、マングローブの成長や枯死、移植などがあるのでその後に変化があると思います。略図と学名を別紙 2 に添付しました。数字は樹齢を示します。

12 . まとめ

日本に帰って既に 3 ヶ月以上まとめようという気はあるものの、手が動きませんでした。ミャンマーの人たちのゆとりを持った急がない生活に共感したためかもしれません。単に怠慢だけのような気がします・・・。

最後に、このミャンマー行を許可してくれた A C T M A N G 向後元彦さま、手続きなど一手に引き受けてくれた事務局の須田さまにはじめ関係の皆さまに深く感謝いたします。

最後の最後にミャンマー語で・・・

“ チェーズティンパディエ ”

写真あれこれ



宿舎近くにある「神の木」から夕日を見る



ヤシの木に登る地元の若者



ヤシの林を抜けて走る！いい気持ちだ！



ニッパヤシで編んだくれたトリの民芸品

現地 FREDA スタッフ - 1



ウォン 76 歳 27.8.7 生
ヤンゴン大学卒
FREDA 事務局長
ヤンゴン在 子供 3 人
元政府の役人で FREDA の偉い人だが自分を「ヤシオと呼んでください」と流暢な日本語を話す。日本人との会話は英語。向後さんの信頼できる相棒！

チンウィン 48 歳 55.8.26 生
ヤンゴン大学卒
Field Assistant
ヤンゴン在 子供 2 人
今回ウォンさんに付いた世話人。裏方に徹して…お金の管理をしていた。慣れてくると意外によく喋る好人物。我々の前では笑顔を絶やさなかった。

ウィンウィン 42 歳 61.12.5 生
ヤンゴン大学卒
Forester of Project
カニヤンゴン村出身 子供なし
現地スタッフの筆頭で片目が悪いがマングローブをよく知っているまじめな人物。ウォンさんの行くところに必ず先回りして彼がいた。ビールを飲みます。



ヌーヌスエ 22 歳 81.5.13 生
バティン大学生(バティン市)
Clarktical Secretary
デビンゼイ出身で現地唯一の我々の前に出てくる女性スタッフ。ウォンさんの身の回りの世話をやいていた。毎日タナカ(黄色い化粧)の塗り方を教えるおしゃやでシャイな女性。自転車にも乗りボートも漕ぐ。



ナイレンタ 26 歳 77.11.11 生
ヤンゴン大学卒
Forester of Project
シェービアー出身 未婚
体は小さいが知能は豊富。意外に照れ屋でまじめな若者だった。しめるところはキッチリしめる同年代スタッフのまとめ役。妹は何故かアマに住んでいた。



モウントンリンアン：通称トミー
28 歳 75.7.17 生 ボガレー高校卒
Forest Helper ボガレー出身 未婚
補助の仕事をしていた。外見は好男子、中身も好男子かは不明。ギターや歌、またミャンマーダンスなどがうまい。父もここのスタッフ。兄嫁がオボクインチャンで店をやっている。そこのじいさんは 101 歳??



リンティン 33 歳 70.12.12 生
ボガレー高校卒
FREDA の大型船の船長
ボガレー在 子供 1 人
元料理長も兼ねていた。かなりアルコールを飲むらしい。毎晩大型船の中で飲んで寝ていた。モウモウのお話も、ボガレーの十里の船



ルーウィンモウモウ 22 歳
81.9.4 生 ボガレー高校卒
FREDA の小型船の運転士
ボガレー在 未婚
夜のあいた時間などには身の回りのものを使って我々にあやしい(インチキ臭い?)手品で喜ばせてくれた。リンティンのお話も

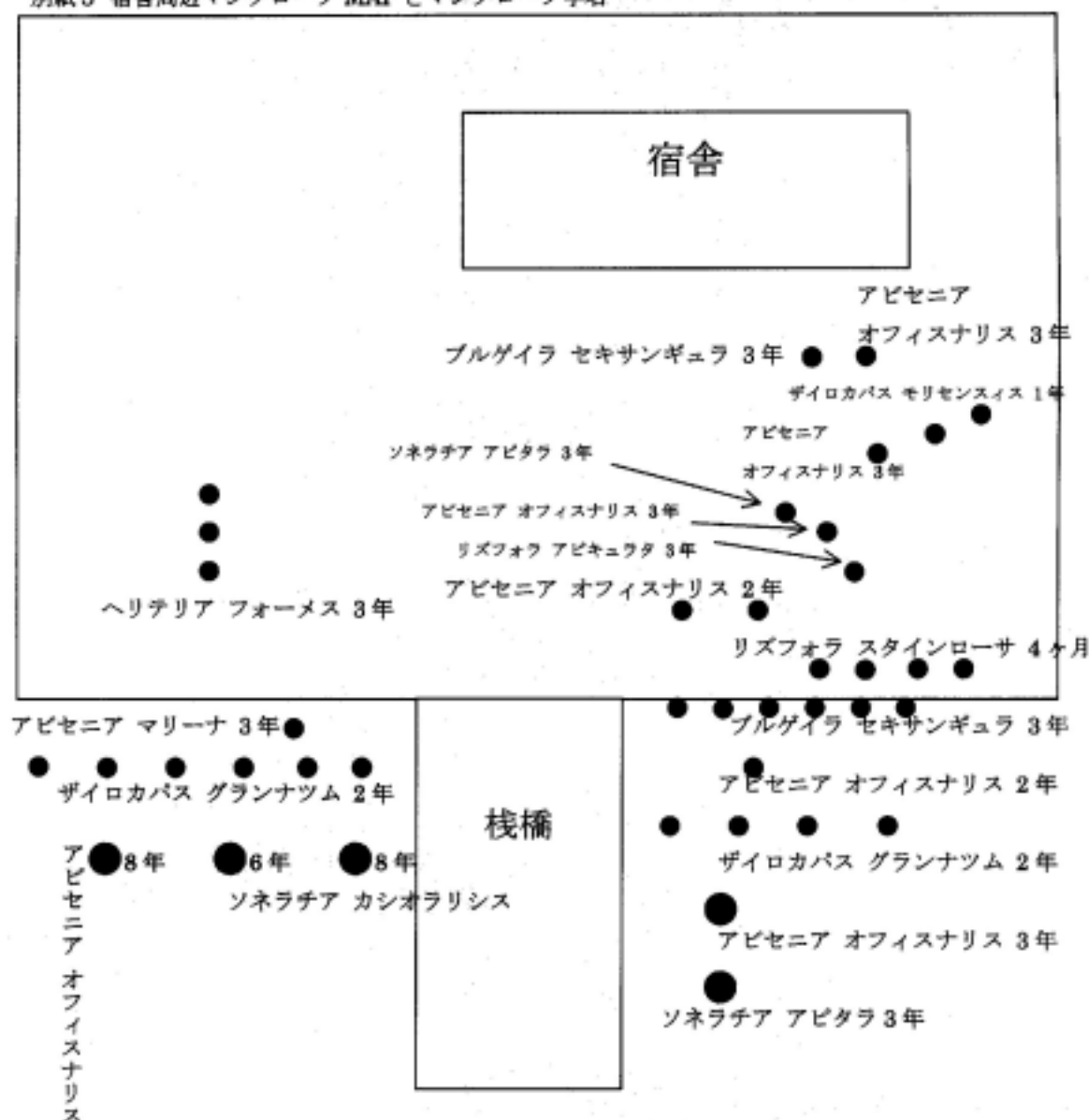


ソーデンイエール 47 歳
56.8.4 生 高校卒 料理長
ボワデッ在 子供 8 人
甲高い声なので彼との会話は苦手だった。唄を歌っても声はでかい。慣れてくるに従ってタメグチで冗談を言っていた。日本人好みの味を知っているのか料理は

現地 FREDA スタッフ - 2

		
ラーシュエ 58歳 45.7.13 生 House Keeper、Cooker ボガレー在 子供5人 トミーの実父、我々の前に出てくることはほとんどなかった。	シュエイビョー35歳 68.11.28 生 Cook Helper オボクインチャン在 子供3人 料理や洗濯などの仕事をしていた。彼女の家は宿舎に並んで北にあり、家にいた年配の女性（彼女の母？）がニッパヤシの葉で織ったトリをくれた。この造り方は他の現地の人もほとんど知らなかったのが貴重な民芸品だ。時間がなくて今回織り方を教えてもらえなかった。	ケーマーユー23歳 80.1 生 Cook Helper オボクインチャン在 未婚 裏方の若いほうの女性で宿舎の裏で料理や洗濯などをしていた。話す機会はなかったが顔をあわすといつも笑っていた。
		
現地役人?? 船に乗る時と食事の時には不思議とどこからともなく現れる役人らしき人物。顔のホクロに長いヒゲを切ることもなく育てていた。	ボガレースタッフ 大型船の船長リンティンの兄貴夫婦。顔の黒さや体の大きさは弟と瓜分たつ。エラーワディーで10m以上の大きさのワニを見たというが…、本当か？奥さんはユーミンのTシャツを着ていた。	

別紙3 宿舎周辺マングローブ MAP とマングローブ学名



学名	日本名	ミャンマー名
ザイロカバス グランナツム	ホウガンヒルギ	ビンレオツ
アビセニア マリーナ	ヒルギダマシ	ダマビュー
ヘリテリア フォームス	サキシマスオウノキ	カナゾウ
アビセニア オフィスナリス	マルバヒルギダマシ	ターメジツ or ターメネツ
ザイロカバス モリセンシス	ホウガンヒルギ	ジャナ
ソネラチア アビタラ	ムベンハマザクロ	カンバラ
ブルゲイラ セキシサンギュラ	ロツカクヒルギ	ビューシュエイワツ
リズフォラ アビキュラタ	フタバナヒルギ	ビューチュラーアポー
リズフォラ スタインローサ	ヤエヤマヒルギ	—

このレポートは、2003年12月、ACTMANGのプロジェクトに参加させていただいたメンバーが原稿を持ち寄って作成したもので、ACTMANGの正式な報告書ではありません。

向後さん、柳田さんを除いた他の4人はマングローブについてもNGO活動についても興味は持っていましたが、素人なのでいくつかの思う違いもあるかもしれません。

しかし、現地では目を見開き、耳をそばだて、人々とふれあい、鼻をひくひくさせ、足の裏で地面をつかみ、水に飛び込み肌、舌で食を味わってきました。この感覚はマングローブとマングローブ地域にすむ人々について生のレポートになったと思っています。

印刷資料にしたら、たいがいはその辺に積み重ねられるだけで、紙の無駄にもなりますので、CDで残すことにしました。

1

ページメーカーで作ったものをACROBATで出力しました。これはACROBAT READERがないと読めないのですが、たいていのパソコンにはインストールされています。もしなければ

<http://www.adobe.co.jp/products/acrobat/readstep2.html>
からダウンロードしてください。

2

これはインターネットエクスプローラーで読むことができます。これもたいていのパソコンには入っているので、ただクリックれば、読めるはずです。

このような機会を与えてくださいました向後元彦さんに感謝いたします。またACTMANGの須田さん、現地ではウ・オンさん、それにFREDAのみなさん、ありがとうございました。

2004年4月20日

三輪主彦、柳田耕一、中山嘉太郎、
山上庄子、笥美知子（年齢順？）